

Fig.215 SB11・12 柱穴写真

8. 溝と柵列による方形区画

SD32・SD33・SA03

(位置と配置) 溝跡SD32とSD33、柵列SA03は整然と配置され一連の方形区画を構成する遺構群である。G 2区の南西隅、前述の建物による方形区画SB11・SB12と同位置に方位をえて配置される(全体図Fig. 210、周辺図Fig. 172、写真Fig. 211)。

(方位) いずれも方位座標軸にはほぼ一致するが、柵列SA03の柱筋で見る限り厳密にはごくわずか時計回り方向に振れています。南北列(P15～P22)でN-2°-Eである。溝の軸方位は厳密に見極めにくいが、SA03と均等間隔が保たれており、上記の方位と一致するとも良い。

(溝の規模) SD32は東西に長さ19m検出し、さらに西に調査区外へと続く。SD33は東西16m(内法は15m)で直角に南に折れ、南北長さ18.6m検出したが調査区外へと続いている。両溝の間には方形区画の溝が切れる部分が長さ8mにわたって存在している。これを含めた方形区画の東西検出長は43mで、さらに西方向へと続く。なお溝が切れる部分は方形区画への出入口としての機能をもつ可能性がある。少なくとも調査区内ではSD32が南に折れる様子はみられないため、この出入口部分は方形区画の中軸線上にあるとは考えられず、東側に寄った位置に設けられている。出入口状の施設が複数設けられた方形区画も推定可能である。

SD32部分は溝底面が平坦ではなく、そのため溝の深さは30cm～60cmと凹凸がある。これに対してSD33部分は断面形が整った台形になるように掘られており、底面は完全に平坦に加工されている。深さは約60cmである。

(柵列の規模) 柵列SA03は溝の内側に沿って配置される。柵を構成する柱は2.7mの均等な間隔で立てられ、北辺ではP1～P15の柱間14間、東辺ではP15～P22の7間分検出している。前述した溝が途切れる部分にも柵列の柱穴は等間隔で配置されており、幅をもつ門などの構造物は設けられていない。この部分が出入口としての機能を持つものであれば、柵列になんらかの開閉装置が備わっている

ことも考えられる。

(柵列の構造) 柵立柱によって柱を1本ずつ立て、これを連結して柵としたものである。地上部分の構造は不明で、塀と呼称すべきかもしない。貫や横板の構造、屋根掛けの有無などは一切復原できないが、整然とした柱穴の配置からみて丁寧な造りが想定される。

柵列の柱穴は溝の縁から1.5mの間隔を隔てた位置に配されている。北辺の西半(SD32に並行する部分)では柵の柱は1本だけではなく、主柱と添柱の2つが組みあって確認された。主柱は柱穴径80cm～110cm、深さ70cm前後、添柱は径40cm～50cm、深さはやや浅く50cm～60cmである。主柱と添柱は約1.4mの間隔をもって配置される。添柱は溝SD32の縁ラインと重なるように位置しており、この柱穴を埋める埋土は溝SD32の埋土と区別できなかった。したがって柵列が解体される際に柱が抜き取られ、一連の埋土によって溝と共に埋められたと考えられる。なお添柱の柱穴は垂直方向に対して傾きが無く、まっすぐ掘られている。柱痕跡が無いため間接的な推定だが、添柱は垂直に立てられていた様子がうかがえる。したがって柵壁面に対して個々の添柱が斜めに寄りかかって立てる構造ではなく、並んだ添柱の頂部に横架する材を乗せ、これを柵列本体と連結するような、かなり頑丈な構造をもつ添柱の支持が推定される。

一方、柵列SA03北辺の東半(SD33と並行する部分)では、西半とは異なる柱穴の構造が検出されている。具体的にはP10～P14の部分である。西半では主柱と添柱の柱穴が独立して検出され、両者とも明確な建て替え、抜き取りなどの痕跡が無かったのに対し、P10～P14では主柱と添柱の柱穴がつながり、一連の平面プランをもって検出された。これはFig. 223の七層断面図に示したように、複数回にわたる抜き取り、建て替えに伴うものであることが分かっている。主柱と添柱は溝状につながった坑を掘って抜き取られており、土層の切り合いをみると最大で3回の抜き取り・建て替えがあったことがうかがえる。なお最初の建設時に主柱と添柱が独立した別の柱穴であったかどうかは不明である。下層

に残されている埋土(図中1層)が当初の掘り方であれば、当初から一連の溝状掘り方内に両者が一括して立てられた可能性も残る。

なお添柱は北辺のみに付随しており、東辺と北辺の溝が途切れる部分には認められない。この部分については1本柱の柵列で、北辺とは異なる構造であったことがうかがえる。

SA03の柱穴のなかには、底近くに石を置いて礎盤(暗礎)としたものがあった。Fig. 226に写真を掲載したように、平坦な面をもつ大きめの石を1つ置くものと、円錐を5個前後固めて置くものとバリエーションが認められる。また全ての柱穴に礎盤がある訳ではない。

(SD33の埋土堆積状況) 上層断面図をFig. 216に示している。3箇所での堆積状況を図示したが、いずれも最下層にあたる部分では水流の作用による粒度淘汰を受けた堆積を確認している。ブロック状の塊が含まれる部分もあることから、一時的にはある程度強い水量があったこともうかがえる。SD33底の標高は検出した範囲内では7.0mでほぼそろっており、際だった高低差は認められない。また溝の一端は途切れているため、常時水流があるような水路としての溝とは考えにくい。

平常はほとんど流れがなく、気候によって水位の上・下があるような壕状の溝であったものと推定される。なおFig. 216に示した埋土の状況から、2回以上の溝の掘り直しがあったことがうかがえる。最終的には幅が細く浅い溝であったらしい。この最終の埋土にはブロック状の塊が多く混入していることから、SD32と同様に人為的に埋め立てられた可能性もある。ただし後述のSD32埋土からは多量の遺物が出土しているのに対して、SD33からの遺物出土量は非常に少ない。

(SD32の埋土と遺物出土状況) Fig. 221に実測図を、Fig. 222に写真を示した。溝は柵列の添柱穴とともに一括の埋土で埋まっており、人為的に一度に埋められたと考えられる。この埋土中には十器が高い密度で包含されており、意図的な廃棄がむなわされた可能性もある。遺物の水平分布は遺構全体にまんべんなく広がっており、垂直分布については上面か

ら底近くまで偏り無く含まれている。このような分布状況からみると、溝を埋め戻す作業中に遺物を投棄したのではなく、埋土が供給される元の場所で廃棄、混入したものが一括して運ばれた可能性もある。

(遺物の内容と時期) 出土した遺物について実測図をFig. 230~231に、写真をFig. 256~263に掲載した。各種の須恵器、赤彩土師器、土師器甕などが出土している。詳細は次節で述べるが、特殊な遺物としてはSA03 P 2 Bから出土した円皿硯(Fig. 231~39)、SD32から出土した須恵器坏蓋の転用硯(Fig. 231~24)、製塙上器(Fig. 230~14)などがある。

遺物の時期には若干の幅が認められる。最も新しい年代のものとしては、須恵器坏(Fig. 231~25~28)、赤彩土師器皿(Fig. 230~11)などがあげられる。また非掲載とした小片のなかにも新しい時期のものがいくつか含まれる。具体的には須恵器坏蓋の口縁部で端部の崩折が短く、宝珠状つまみがつくとみられるもの、須恵器坏身で高台が底部最外線につくもの、などである。以上上の上器は8世紀後葉~9世紀前葉の年代が考えられる。したがってSD32、SD33、SA03の廃絶年代はこれ以降であるといえる。

前項で扱った大型建物による方形区画SB11・SB12は遺構の切り合いから、溝と柵列による方形区画より古いことがわかっている。このSB11・SB12が8世紀後半に解体されているため、その後に設けられた溝と柵列による方形区画の設置年代はこれをさかのぼらない。したがって、SD32・SD33・SA03が機能した期間は8世紀後葉~9世紀前葉の間に納まるものと考えられる。

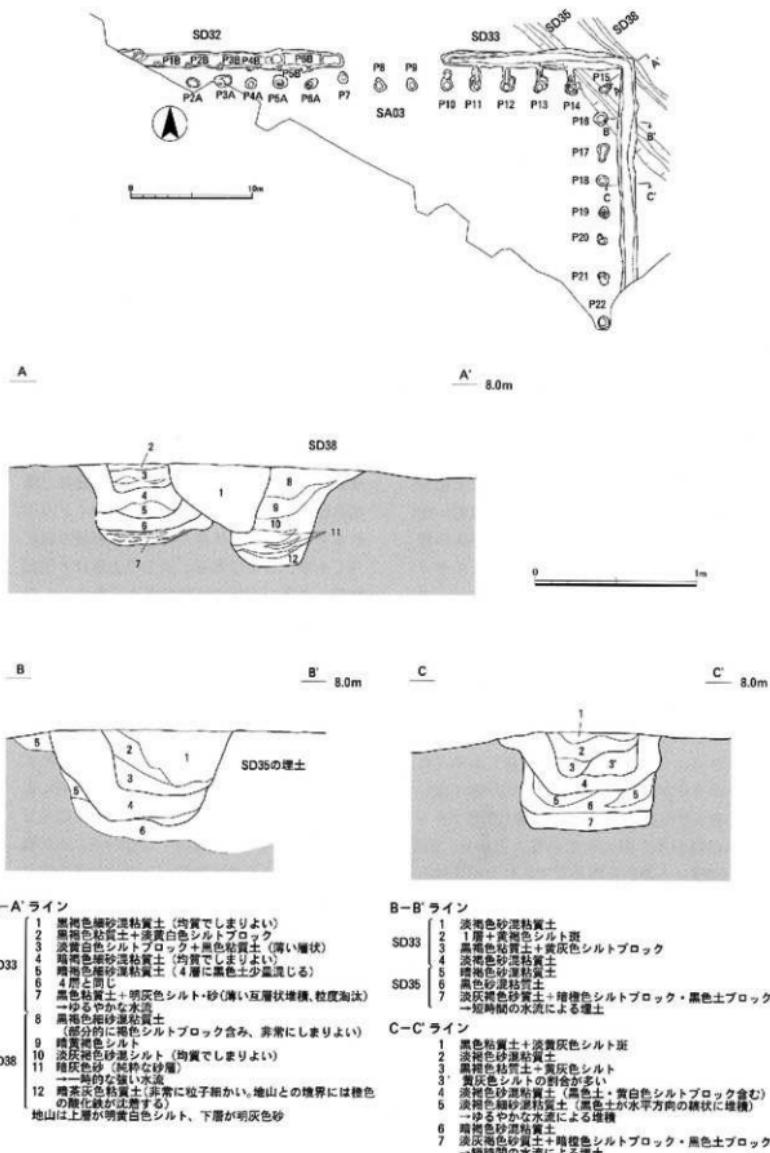


Fig.216 SD32・33、SA03 遺構図 (平面図 S=1/400、土層図 S=1/30)



Fig.217 SD32・33、SA03 遺構写真（北東から、人の位置はSA01の柱穴）



Fig.218 SD33・SA03 遺構写真（北西から、方形区画の東半分）



Fig.219 SD33南北溝部分 遺構写真（左：南から、右：北から、Fig.216のBライン）



Fig.220 SD33南北溝部分 土層断面写真（北から、Fig.216のCライン）

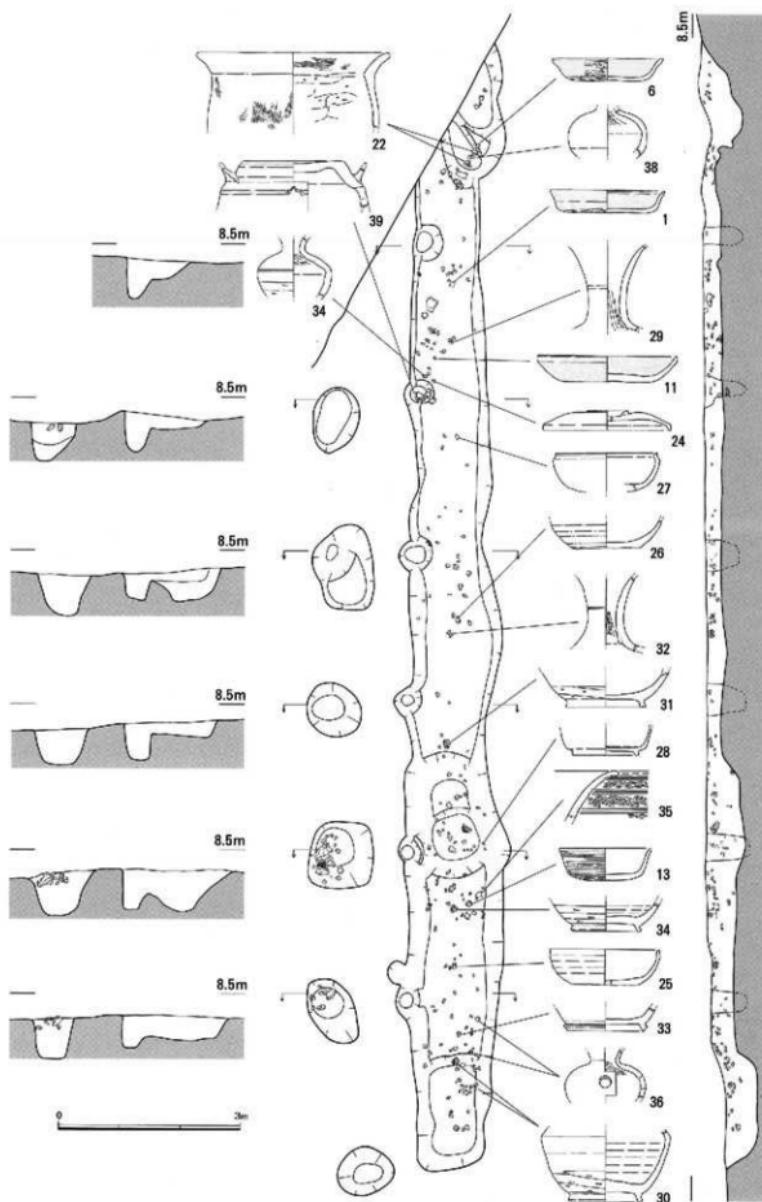


Fig.221 SD32・SA03 遺構図 (S=1/80)

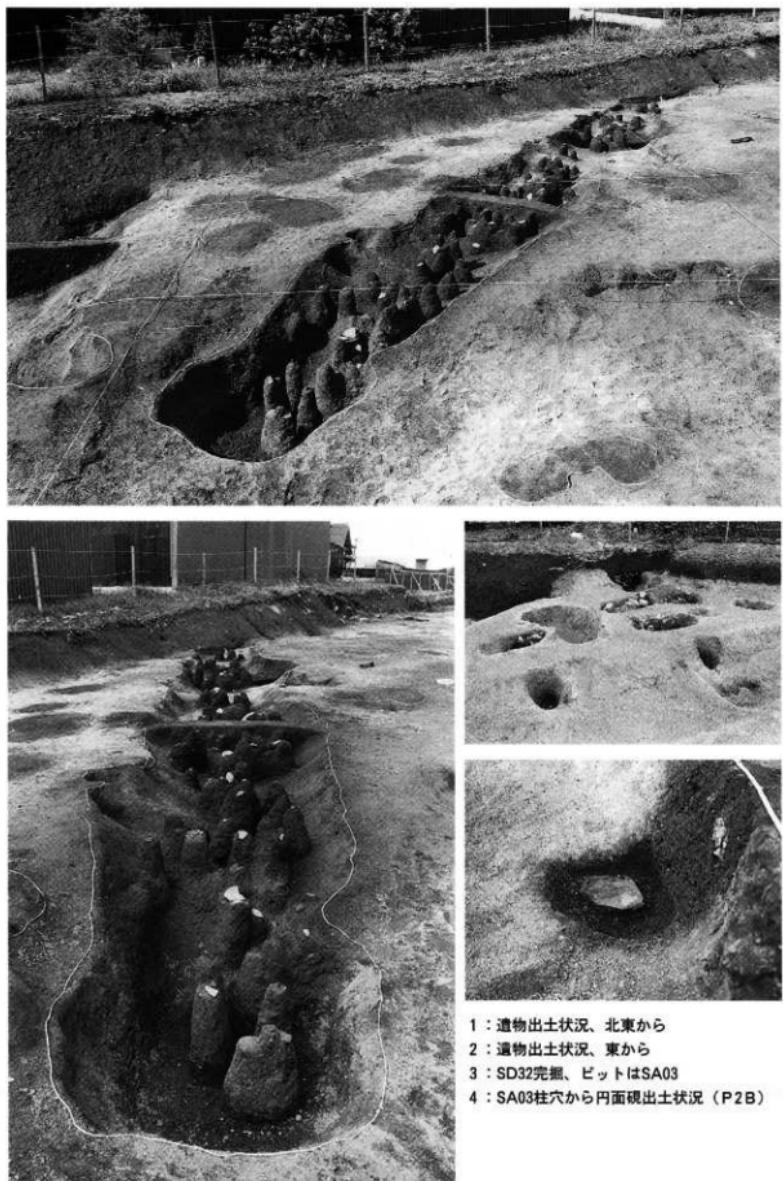


Fig.222 SD32・SA03 遺構写真

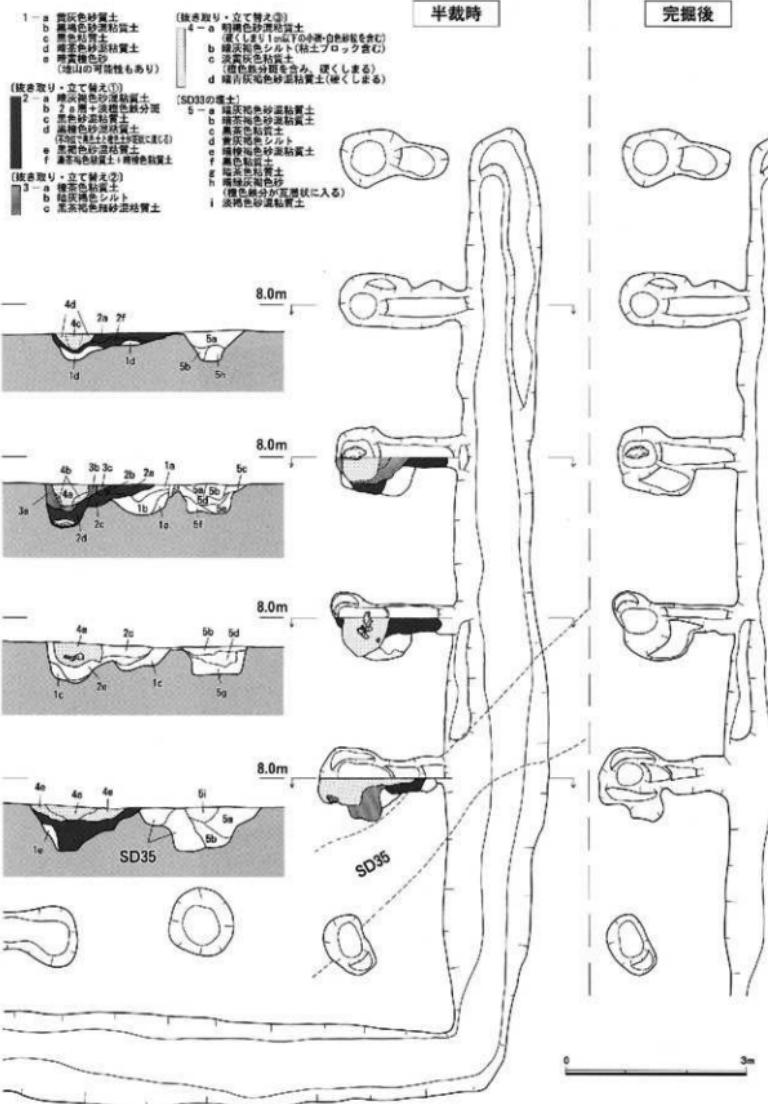


Fig.223 SD33・SA03 遺構図 (S=1/80)

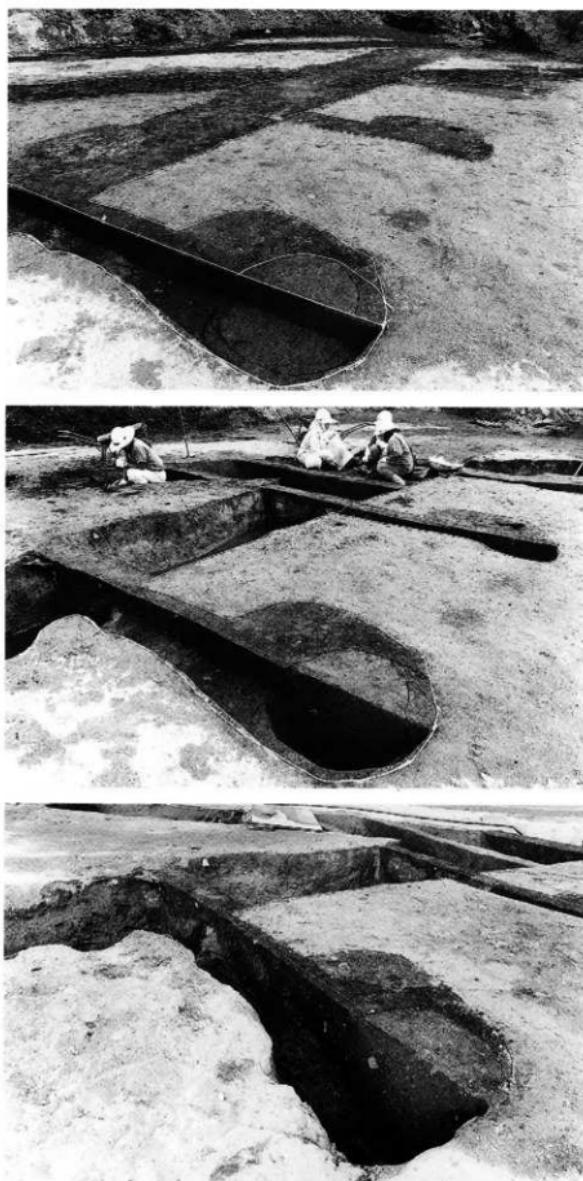


Fig.224 SA03 (P12) 遺構写真 (南西から、上から調査順)



1 : P13、南西から



2 : P14、南西から



3 : 右からP11、P12、
P13、完掘時
下が北

Fig.225 SA03 遺構写真



1 : P 8、東から



2 : P 19、南から



3 : P 12、西から

Fig.226 SA03 遺構写真 (礎盤石をもつもの)

第3節 遺物の詳細

以下では、前節で遺構の詳細を述べた都家関連の建物・柵列・溝から出土した遺物の詳細を解説する。法量や調整など基本的な項目については観察表Tab. 27~39に記載しており、ここでは特記すべき点に限って述べる。なお実測図はFig. 227~231に、写真はFig. 232~263に掲載している。

SD06 (実測図Fig. 227、写真Fig. 232~233)

比較的川土量は多いが、古い時期の遺物が混入しており時期幅がある。1は弥生土器の底部、2と3はかえりをもつ坏身で、赤彩された高坏(13~16)をあわせ古墳時代後期後葉のものが混入している。

転用硯が2点出土しており注目される。6は須恵器坏蓋が転用されたもので、内面が使用によってつるつるに摩耗し、うっすらと墨痕が残る(写真Fig. 232)。また10は長頭壺などの底部が破損後に硯として転用されたものである。実測図に示したように、破面にも墨痕が付着している(写真Fig. 233)ことから、破損したものをあえて利用していることが見て取れる。

11・12は赤彩土器の坏で、11はつまみのついた蓋である。土師器では類例の少ない器形であるが、須恵器で同様のものがある。低い宝珠状のつまみ形状が須恵器坏蓋と共に、8世紀後葉~9世紀初頭ごろの年代が考えられる。なお出雲国府で出土した同様の須恵器はやや古い年代が与えられている。

須恵器坏は8世紀前半の輪状つまみの蓋(6・7)と高台付の坏身(8)、8世紀中葉~後葉の底部回転糸切りの坏身(5・9)などがある。

Fig. 233に写真のみ掲載したものは、壇、堤瓶または横瓶、坏などの破片である。

SD12 (実測図Fig. 227、写真Fig. 234)

遺構の面積に比して出土量は少ない。17は高台付坏で、側面が急角度で立ち上がる器形、高台の棱がシャープで底部の外寄りにつくこ

となどの特徴からみて8世紀後半のものである可能性が高い。なお底部切り離しの痕跡は確認できない。

Fig. 234に写真のみ掲載したものは須恵器壇、古墳時代の坏身、高台付の坏などである。

SB01 (実測図Fig. 227、写真Fig. 235)

周辺遺構との配置関係から8世紀後半の建物と推定されるが、柱穴内から出土した遺物はいずれも古墳時代のものである。いずれも混入と判断される。20、21が坏蓋、22~25が坏身で、蓋大口部の調整、身受け部のかえりなどから古墳時代後期後葉のものとみられる。このほかFig. 235に写真のみ掲載した須恵器壇などが出土している。

SA01 (実測図Fig. 227、写真Fig. 236)

上記SB01と同様な状況である。図示した須恵器蓋、須恵器坏の他は、写真のみ掲載した須恵器壇、同壇類底部などの破片が出士している。

SB03 (実測図Fig. 228、写真Fig. 237)

須恵器坏の蓋身が1点ずつ出土している。身にかえりをもつ坏の最終形態で、口径の縮小化が最も進んだ段階のものである。出雲6期、7世紀中葉頃のものとみられる。

このほか写真のみ掲載したものの赤彩土器の壇が数点ある。

SB04 (実測図Fig. 228、写真Fig. 238~239)

須恵器坏蓋の破片がいくつかある。32と写真のみ掲載した破片は輪状つまみをもつ蓋とみられる。いずれも内面に薄く黒色の付着物があり、転用硯として使用された墨痕である可能性もあるが小片のため断定できない。33は身として図示したが、蓋の可能性もある。

34は鉄製の楔で、全長130mm、最大幅15mm、最大厚3mmの平釘状をなす。実測図は保存処理前に作成したため特徴を把握しきれていないが、鏽を除去したところ頭部がきれいな弧を描き、身の中ほど部分が巻曲するなどの特徴が明らかになっている(写真Fig. 239)。樹脂含浸など保存処理後の計測値であるが、

重量は24gほどであった。

SB07 (実測図Fig. 228、写真Fig. 241)

35の須恵器高坏は古墳時代のもので混入と判断される。3方に方形透かしをもつ。36は須恵器坏身底部で、高台部分の破片である。焼成が悪く、表面が吸炭したように黒色を呈する。

SB08 (実測図Fig. 228、写真Fig. 242~243)

他の建物遺構に比べ新しい時期の遺物が比較的まとまって出土している。37~41は須恵器坏蓋で、器高が低く端部の折れが小さいことが特徴である。つまみ部分はいずれも失われているが、低い宝珠状のつまみがつくものとみられる。8世紀後葉～9世紀前葉ごろのものと判断される。

42は底部回転糸切りの須恵器坏身で、底面に「若」1文字が墨書きされる。字の位置は幾分片寄っておりさらに別の文字を記す余白は充分あるが、これに統く文字があった痕跡は確認できない。

43と同様の赤彩土師器坏は、写真を掲載したように小片が数点出土している。

45は鉄製の紡錘車で本来の直径52mm前後、中心に方形の孔が開く。保存処理後の重量は37gであった。

SB10 (実測図Fig. 228、写真Fig. 244~245)

46は須恵器坏蓋、47は同趣である。題は高台が付くもので、円孔部分は失われている。

SB12 (実測図Fig. 228、写真Fig. 247)

49は須恵器坏蓋の破片で、肩部に稜が付いて崩折する。つまみは失われているが、推定される怪からみて輪状つまみにはならず、宝珠状つまみがつくものとみられる。8世紀後葉の年代が与えられる。50の赤彩土師器高坏は古墳時代後期のものが混入したと考えられる。

SD30 (実測図Fig. 229、写真Fig. 252~255)

SD30の遺構については次節で扱うが、遺物については他の遺構と併せてここで扱う。

1は棒状の鉄製品で、鉄釘などとみられる。断面正方形の角棒状で、出土時には図示のように須恵器坏蓋が銷び付いていた。残存長が11.9cm、太さは一辺5mmほどである。保存処理後の重量は約11gである。

2は須恵器円面硯で、脚端径23.8cmの大型のものである。脚部には方形の透かしが切り抜かれている。接合しないが、付近から墨を擦る隙部分とみられる破片も出土している(写真Fig. 253)。表面は使用によってつるつるに摩滅している。

4は須恵器坏蓋で、内面は摩耗し墨痕が付着している。転用硯として使用されたものである。

この他にはFig. 255に写真のみ掲載した赤彩土師器坏、十師器壺、上製支脚などが出土している。赤彩土師器坏には高台付のもの、高台がつかず静止糸切りのものなどが含まれる。

SD32 (実測図Fig. 230~231、写真Fig. 256~262)

比較的多くの遺物がまとまって出土している。1~11は赤彩土師器坏で、11のように口径が大きく外に聞く皿のような器形のものもある。器形や端部の形状にバリエーションがあり、時期的に一括性があるものか判断できない。13の上師器坏は口径が小さく非常に丁寧なミガキを施すもので、やや異質なものである。

14は製塙土器の破片である。指押さえによる成形痕が残される。製塙土器については注意して遺物検討を行ったが、他の遺構からは出土していない。

15~23は土師器壺である。破片が多いが、SD32からは煮炊具がまとめて出土している点が注意される。

24~28は須恵器坏を図示した。24の蓋は内面に墨痕が付着するもので、転用硯として使用されたものである。25~28の坏身は型式差があるが、底部糸切りの25、26、高台が外寄りについて体部が鋭角に立ち上がる28などの特徴から、おおまかに8世紀中葉～9世紀前葉にかけてのものと判断される。

29~34は長頸壺で、造りが厚いためか大きめの破片で出上している。31の底面には「×」のヘラ記号が刻まれている。

39は円面鏡の上部である。SD32の廃絶と同時に埋土中から出上しているものの、鐵密には柵列SA03の添柱P 2 Bから出土したものである。脚部側面には透孔が2箇所分残存している。透孔は上半しか残らないため、全体の形は不明だが、星形に切り抜かれたものである(写真Fig. 261)。2箇所の透孔は中心からの角度90°の位置に設けられているた

め、全体では4箇所の透孔があったものと復原される。

40は鉄製品で平面形は鐵などの利器に観察されるが、刃がつかず切り抜いた板状のものである。用途は明らかではない。

SD33(実測図Fig. 231、写真Fig. 263)

Fig. 231~41、42がSD33からの出上である。41は脛などの底部、42は放射状の暗文を施した赤彩土器器坏である。

Tab. 27 SD06出土遺物観察表 (Fig. 227)

番号	種別	器種	法 直(cm)	色 調	調 査(内面/外面/特記事項)	残 留 度	
1	陶器	壺・壺	口径: 6.2 底径: 10.0	内外面: 深黄色 外: 棕褐色	内面: 指壓さび・外面: ハケメ模ナダ	底面のみ、全周の70%	
2	陶器	杯	-	内外面: 深灰色	内外面: 口縁ナダ	口縁部分のみ、全周の10%以下	
3	陶器	杯	-	内外面: 暗灰色	内外面: 口縁ナダ	口縁部分のみ、全周の10%以下	
4	陶器	杯	-	内外面: 暗灰色	内面: 口縁ナダ・外面: 体部研磨ナダ、底面へつ切りの透孔化成のナダ、底面の小範囲へラッカズリ	体部下半から底面にかけて、全周の20%	
5	陶器	杯	-	8.9	内外面: オリーブ灰	内面: 体部凹凸ナダ、底面へつ方向のナダ/外面: 体部研磨ナダ・ラッカズリの透ナダ、底面周辺目切り	体部下半から底面のみ、全周の50%
6	陶器	杯	13.8	8.2	内外面: 暗灰色	外: 山字ナダ/外面: 口縁部研磨ナダ、天井部研磨ナダ・ラッカズリの後回転ナダ/内面: 内面めらかに擦耗、ガラス質	全周の70%
7	陶器	杯	-	-	内外面: 深青灰色	内外面: 口縁ナダ	底面のみ、外周の10%以下
8	陶器	杯	-	-	内外面: 暗灰色	内面: 口縁ナダ・外: 体部三輪へテナジリの浅高台貼付に透刃形の透ナダ	底面のみから底面にかけて、全周の10%
9	陶器	杯	14.0	9.5	内: 暗オリーブ灰色 外: 体部: 深青灰色 オーリーブ褐色、以下は オーリーブ灰色	内面: 体部凹凸ナダ、底面へつ方向のナダ/外面: 体部研磨ナダ、底面周辺目切り	全体の50%
10	陶器	碗	-	9.5	内: 暗オリーブ灰色 外: 暗灰色	内面: 口縁ナダ・底面周辺研磨ラッカズリ、底面貼付残餘ナダ・底部不完全窓ナダ/内面: 裂向に隙隙	底面下半から底面のみ、底部には半光
11	土器	青	-	-	内外面: 青色	内面: 口縁ナダ/外面: 植物模様方向のヘリミガヌ、天井部へラッカズリ、つまり斜付窓付口縁ナダ	全体の15%
12	土器	青	14.0	3.7	内外面: 淡青色 外: 淡青色	内面: 口縁ナダ/外: 口縁へ側面研磨ナダ、底面へラッカズリ・整形後底盤の不規則なナギサ	全周の70%
13	土器	青	-	8.6	内外面: 淡青色 外: 淡青色	内面: カズリ・不定方向のナダ、範囲ココナデン/外面: 口縁ナダ・底部の痕ナダ	底面のみ、全周の40%
14	土器	青	-	8.0	内外面: 淡青色 外: 淡青色	内面: 不定方向のナダ、カズリ・前部ヨコナダ/外面: ヨコナダ	底面のみ、全周の40%
15	土器	青	-	-	内: 淡青色 外: 淡青色	内面: 接合部研磨ナダ/外: タテハケ、滑らかなナダ・环节の跡を削て台んで結合	底面のみ、全体の20%
16	土器	青	-	11.0	内外面: 暗色	内面: 深いラッカズリ・範囲基準めらかなかなへラッカズリ 外面: 範囲基準方向のラッカズリ、底部へ脚錐型ナダ /底面との半周は接合部で差違	底面のみ、全周の80%

Tab. 28 SD12出土遺物観察表 (Fig. 227)

番号	種別	器種	法 直(cm)	色 調	調 査(内面/外面/特記事項)	残 留 度	
17	陶器	杯	口径: 6.0 底径: 7.0	内外面: 暗色	内外面: 口縁ナダ	底面から底面にかけて、全周の20%	
18	陶器	杯	-	-	内外面: 暗色	口縁部分のみ、全周の10%以下	
19	陶器	杯	-	-	内外面: 暗色	内外面: 口縁ナダ・強烈な可塑性あり /内面: 深いラッカズリ・範囲基準めらかなかなへラッカズリ /外: 範囲基準方向のラッカズリ、底部へ脚錐型ナダ /底面との半周は接合部で差違	1/2周ののみ、全周の10%

Tab.29 SB01出土遺物観察表 (Fig.227)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
20	P 3	須恵器	环 直	11.4 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、底部に乳突など無し、外 面：天青ケズリ無し、ナゲ	全体の10%
21	P 16	須恵器	环 直	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、底部に乳突／外側：区輪 ナゲ、直線に成る	全体の5%
22	P 3	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
23	P 12	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
24	P 14	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
25	P 14	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%

Tab.30 SA01出土遺物観察表 (Fig.227)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
26	P 1	須 惠 器	环 直	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
27	P 8	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%
28	—	須 惠 器	底盤	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、底盤方円2方透かし	全体の40%

Tab.31 SB03出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
29	P 10	須 惠 器	环 直	8.2 —	—	外外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、底部外側：天井基部軸ケズリ、 口幅、背面：暗灰色 体部底面ナゲ	全体の30%
30	P 1	須 惠 器	环 身	11.8 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、外面：底盤回転ヘラケズリ、 底物剥離、側面凹リナ	全体の20%

Tab.32 SB04出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
A1	P 6	土 葵 器	直	— —	—	陶 土：深褐色 内面：赤褐色	倒立のみ、底面の10%
A2	P 3	須 惠 器	环 直	(7.0) —	—	内外面：灰黑色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
33	P 2	須 惠 器	环 身	— —	—	内外面：灰黑色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
34	P 12	铁 器 品	腰带环	全長 190mm 3mm	— —	腰带环が底に曲がる。体部中ほどで両端する。 丸頭を正面に向け。底面は黒。	底面が形

Tab.33 SB07出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
35	P 3	須 惠 器	直腰	11.0 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	4割の10%
36	P 1	須 惠 器	环 身	— —	—	陶 土：深褐色 表 面：深褐色	高台基周辺、全周の10%

Tab.34 SB08出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
37	P 6	铁 水 瓶	环 直	12.6 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の10%
38	P 11	铁 水 瓶	环 直	13.0 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の20%
39	P 5	铁 水 瓶	环 身	— —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ、内面に滑溜付着、軽用現	全体の5%
40	P 10	铁 水 瓶	环 身	13.0 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%
41	P 11	铁 水 瓶	环 身	17.0 —	—	内外面：暗灰色 内面：内輪ナゲ	全体の5%
42	P 1	铁 水 瓶	环 身	— (9.2)	—	内外面：灰黑色 内面：内輪ナゲ、底面：底面ナゲ切り、底面に墨書き「吉」	底面の40%
43	P 11	土 釜 器	直	14.3 —	—	陶 土：深褐色 内面：赤褐色	全体の15%
44	P 3	土 釜 器	环 直	— —	—	陶 土：深褐色 内面：内輪ナゲ	全体の10%
45	P 6	铁 板 屋	新鍛漆	— 52mm	—	中心に方形の輪孔が開く	完形

Tab.35 SB10出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
46	P 2	須 惠 器	环 直	— —	—	内外面：灰黑色 内面：内輪ナゲ	全体の5%
47	P 5	須 惠 器	直	— —	—	内外面：内輪ナゲ、内面肉：内面貼り付け後 内輪ナゲ	全体の40%
48	—	土 釜 器	环 直	11.4 (11.0)	— —	陶 土：深褐色 内面：赤褐色	全体の50%

Tab.36 SB12出土遺物観察表 (Fig.228)

番号	柱穴 遺構名	種別	器種	法 寸 (cm) 口径 底面 底盤	色 調	調 整 (内面/外面/特記事項)	残 存 度
49	P 6	须 惠 器	环 直	— —	—	内外面：灰黑色 内面：内輪ナゲ	全体の5%以下
50	P 14	土 釜 器	环 直	— —	—	陶 土：深褐色 内面：赤褐色	底面下部から脚部にかけて、 全体の70%

Tab. 37 SD30出土遺物観察表 (Fig.229)

番号	種別	品種	寸法 (cm)			色 調	調査 (内部/外部/特記事項)	残存度
			横	縦	厚			
1	鉄製品	針	4.9P 11.9cm	-	-	内外面: 銀白色	前面: 漆面形状。漆面部分底面に鋸歯状 内外面: 銀白色、表面 内外面: 銀白色	表面を火く 表面のみ、全周の30%
2	灰 患 器	片端鏡	-	-	33.8	内外面: 銀白色	内外面: 銀白色、表面に2条の浅溝、底面に 凹凸の剥離感、底面 内外面: 銀白色	表面のみ、全周の30%
3	灰 患 器	环 盖	-	-	-	内外面: 銀白色	内外面: 回転ナット	口閉合のみ、全周の30%以上
4	活 也 罩	环 盖	15.1	-	-	内外面: キリーフ状	内外面: 11個の凹部ナット、天井部不完全方向のナット/外側: 内側 内外面: キリーフ状	全体の30%
5	活 也 罩	盖	-	-	-	内外面: 銀色	内外面: 鏡面ナット、鏡面下部底面にカケズノ/内側: 鏡面-鏡面 内外面: 鏡面ナット、鏡面下部底面にカケズノ/外側: 鏡面-鏡面 内外面: 鏡面ナット、鏡面下部底面にカケズノ/内側: 鏡面-鏡面 内外面: 鏡面ナット、鏡面下部底面にカケズノ/外側: 鏡面-鏡面	鏡面から鏡面上半にかけて、 全体の30%
6	活 也 罩	深	-	-	-	内外面: 銀色	内外面: 鏡面ナット	鏡面から鏡面上半にかけて、 全体の70%
7	活 也 罩	共通蓋	-	-	-	内外面: 銀色	内外面: 鏡面ナット	鏡面のみ、全周の30%
8	土 壤 盒	土壌盒	-	-	-	内外面: 銀色	内外面: 銀色	充填部
9	土 壹 盒	銀	16.0	3.4	-	内外面: 銀色	内外面: 銀色	全体の90%
10	土 壹 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀灰色	内外面: 銀色	全体の90%
11	土 壹 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀灰色	内外面: 銀色	全体の15%
12	土 壹 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀灰色	内外面: 銀色	全体の10%以上

Tab. 38 SD32出土遺物観察表 (Fig.230~231)

番号	種別	品種	寸法 (cm)			色 調	調査 (内部/外部/特記事項)	残存度
			横	縦	厚			
1	土 壴 盒	銀	14.0	2.8	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 銀 色(銀色)ナット、底部凹部切りの後底面-カケズノ	全体の60%
2	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 銀 色(銀色)ナット、底部凹部切りの後底面-カケズノ	全体の10%
3	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 回転ナット/外側: 内側: 11個の銀色ナット、底部-カケズ ノ	口縫部から体部にかけて、全 周の15%
4	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側口縫 部-カケズノ	口縫部から体部にかけて、全 周の15%
5	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ	口縫部のみ、全周の15%
6	土 壴 盒	銅	13.6	2.5	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 底部 内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 底部-カ ケズノ	全体の30%
7	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 底部-カ ケズノ	口縫部下部から底部にかけて、全 周の6%
8	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-体部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 底部-カ ケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
9	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 回転ナット/外側: 11個の銀色ナット、底部-カケズ ノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
10	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫ナット/外側: 口縫部-回転ナット、底部下口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の13%
11	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: ダコナット	高台部のみ、全周の10%
12	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 体部回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部 回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部-カ ケズノ	全体の80%
13	土 壴 盒	銅	11.2	4.0	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 体部回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部 回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部-カ ケズノ	全体の80%
14	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 体部回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部 回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部-カ ケズノ	全体のみ、全周の10%以下
15	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
16	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
17	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
18	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
19	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
20	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: ダコナット/外側: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%
21	土 壴 盒	銅	-	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: ダコナット/外側: 口縫部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の10%以下
22	土 壴 盒	銅	31.0	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: ダコナット/外側: 口縫部-カケズノ	口縫部から底部にかけて、全 周の40%
23	土 壴 盒	銅	32.0	-	-	内外面: 銀色(銀 色)、底面 内外面: 銀色(銀 色)、底面	内外面: 口縫部-カケズノ、底部コロナ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ	口縫部から底部上半にかけて、全 周の20%
24	活 也 罩	环 盖	15.5	2.5	-	内外面: 銀色	内外面: 口縫部-カケズノ、底部不完全方向のナット/外側: 口縫 部-カケズノ、天井部不完全方向のナット/外側: 口縫部-カケズノ、底部 不完全方向のナット/外側: 口縫部-カケズノ	全体の40%
25	活 也 罩	环 盖	13.6	-	-	内外面: 銀色	内外面: 体部回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部 回転ナット、底部不完全方向のナット/外側: 体部回転ナット	全体の40%

番号	造形	器種	法量 (cm)			色調	調査 (内面・外面・特記事項)	残存度
			口径	高さ	底径			
26	須恵器	环身	-	-	8.4	内外面：暗青灰褐色	内面：口輪凹字ナメ、底部不定方向のテテ／外唇：体部回転ナメ、底部回転糸切りの底不正四角のナメ	体部下半から底部にかけて、全体の30%
27	須恵器	环身	12.6	-	-	内外面：灰色	内面：回転ナメ／外面：口輪回転ナメ、体部下不正四角のナメ	口輪から体部下半にかけて、全体の15%
28	須恵器	环身	-	-	8.5	内外面：灰色	内外面：回転ナメ／底部は粒状切り、高台晒り付けの底ナメ	底部のみ、全周の10%
29	須恵器	長颈甌	-	-	-	内外面：古黒色	内外面：回転ナメ	底部のみ
30	須恵器	甌	-	-	8.5	内外面：灰色	内面：梨形凹字ナメ／外面：梨形上半は回転ナメ、下半は山筋へケズリ、底部回転糸切りの底ナメ／高台晒り	底部から底部にかけて、全体の20%
31	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内面：梨形凹字ナメ／外面：下部回転ヘラケズリの施回転ナメ、底部へ配糸切り、高台晒り付けの施回転ナメ／底部にヘラ記号「×」	底部から底部にかけて、全体の20%
32	須恵器	長颈甌	-	-	-	内外面：古黒色	内外面：回転ナメ	底部のみ
33	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内面：梨形凹字ナメ／外面：梨形回転ヘラケズリ、高台部へ底部回転ナメ／高台内ナメ	底部のみ、全周の20%
34	須恵器	甌	-	-	8.9	内外面：灰色	内面：回転ナメ／外面：口輪へケズリ、高台晒り	底部のみ、全周の100%
35	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内外面：口輪ナメ／2箇づつのハッキ腰と次腰によって区画された文様3段に3×4条の横溝5道文	口縁部のみ、全周の20%
36	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内面：梨形ナメ、腹部以上山筋回転ナメ／外唇：頬面へ肩部回転ナメ、梨形回転ヘラケズリの施回転ナメ／口沿1周	全体の30%
37	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内面：梨形ナメ、腹部以下山筋回転ナメ／外唇：頬面へ肩部回転ナメ、梨形下半部はヘラケズリ／口沿は欠損	全体の30%
38	須恵器	甌	-	-	-	内外面：灰色	内面：口輪ナメ／外面：口輪回転ナメ、肩部回転ヘラケズリの施回転ナメ／底部は不規	梨形のみ、全周の30%
39	須恵器	口輪甌	-	-	-	内外面：灰色、上面に直輪脚	内面：口輪ナメ／外面：口輪回転ナメ、肩部回転ナメ／直輪脚	梨形のみ、全周の30%
40	須恵器	口輪甌	-	-	-	内外面：灰色、上面に直輪脚	内面：口輪回転ナメ／外面：口輪ナメ／直輪脚	上部のみ、全体の30%
						手面部状だが另つかず、板状をなす		

Tab. 39 SD33出土遺物観察表 (Fig.231)

番号	経年	法量 (cm)			色調	調査 (内面・外面・特記事項)	残存度
		口径	高さ	底径			
41	須恵器	甌	-	-	4.8 内外面：灰色	内面：回転ナメ／外面：回転ヘラケズリ、底部回転糸切り／見込みにはせん状にナメ痕が横状に残る	底部のみ、全周の20%
42	土器	甌	15.8	-	内外面：赤褐色	内面：口輪回転ナメ／外面：山筋回転ナメ／体部へラケズリ／見込みに施回転の輪文をかすかに残る	全体の25%

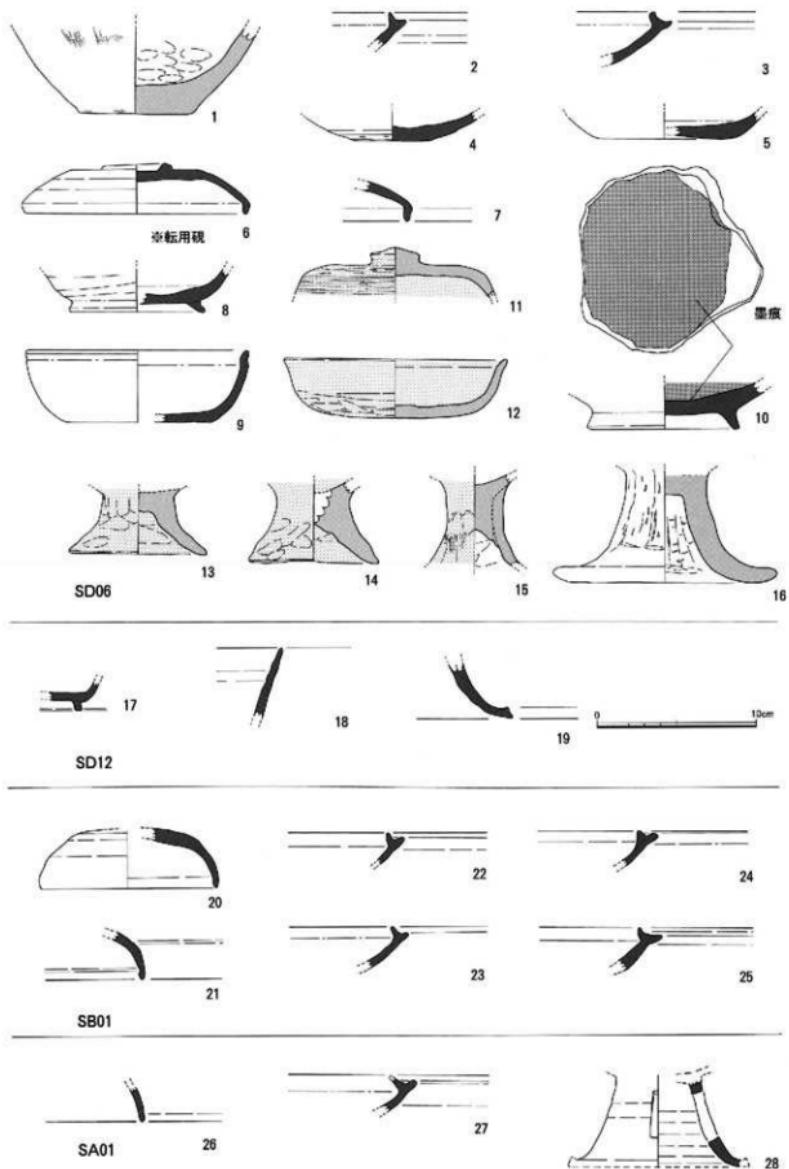


Fig.227 掘立柱建物・満出土遺物実測図① (S=1/3)

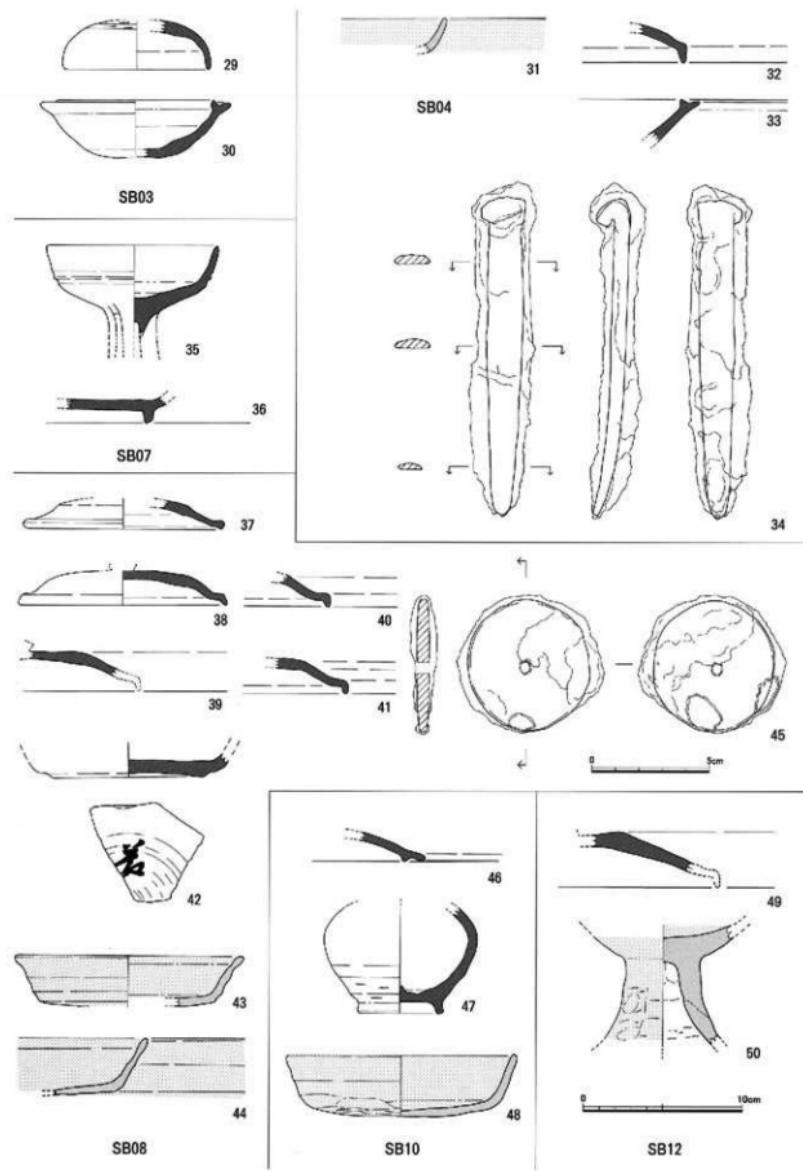


Fig.228 掘立柱建物・溝出土遺物実測図② (S = 1/3、鉄製品は S = 1/2)

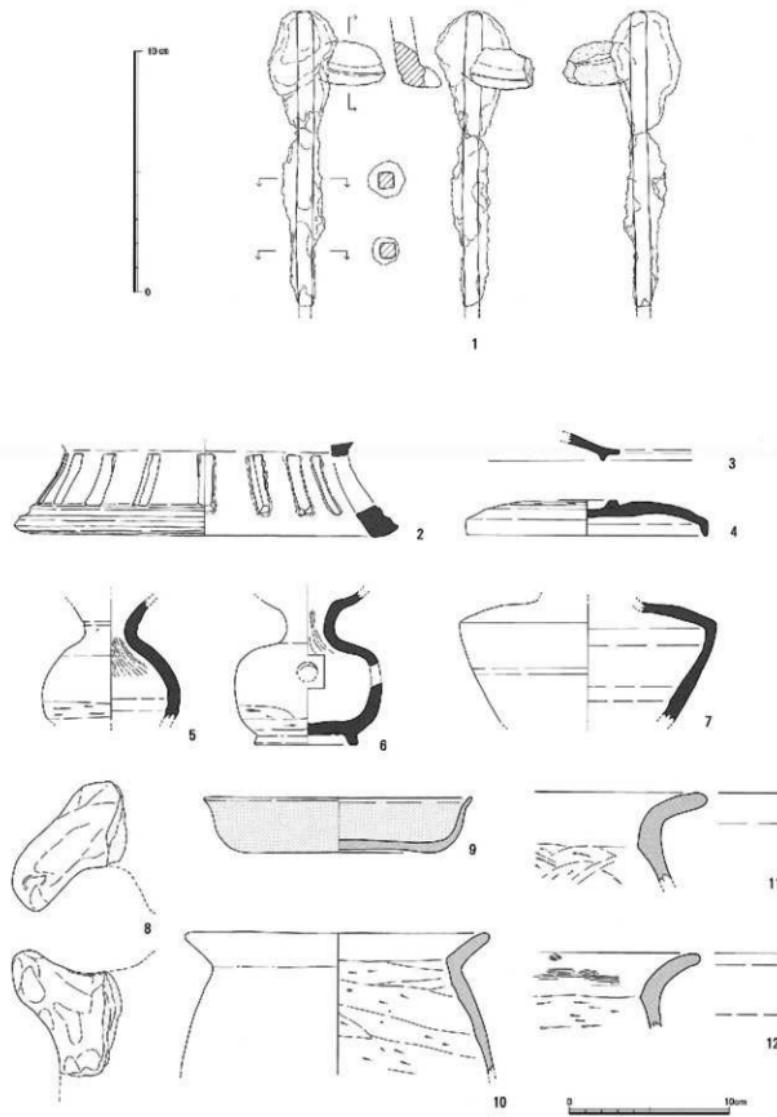


Fig.229 SD30 遺物実測図 (S=1/3、鉄製品は S=1/2)

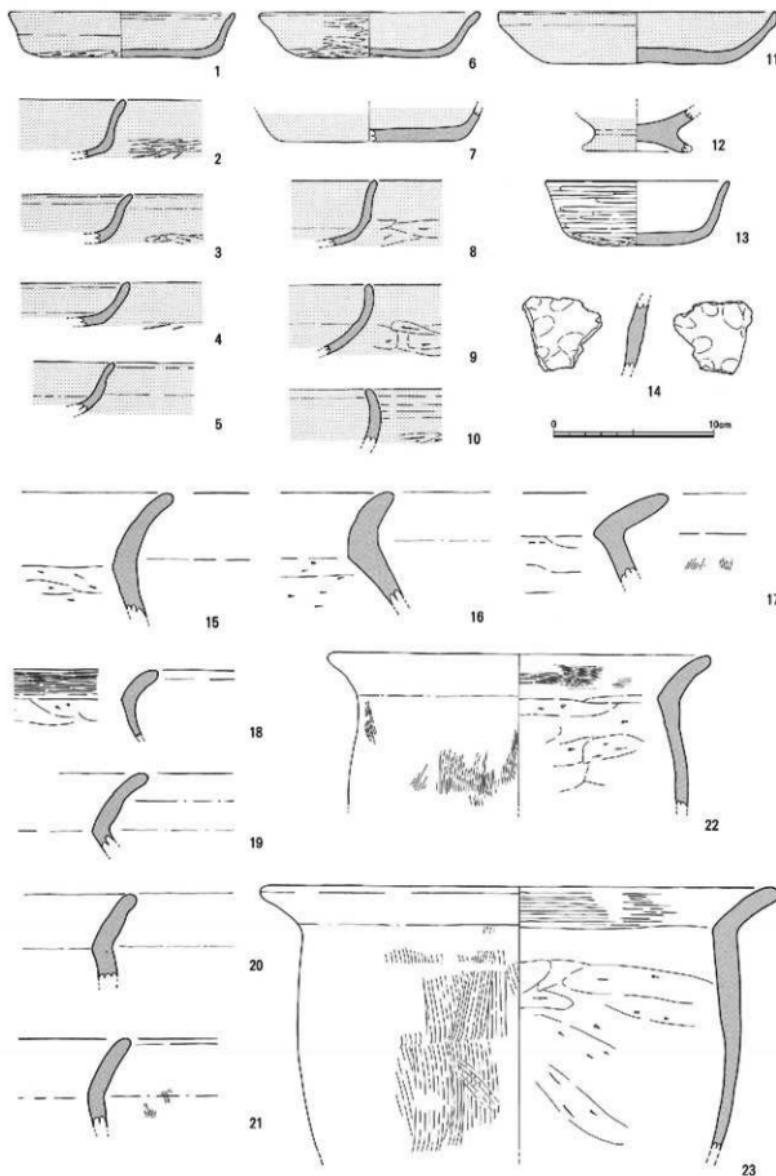
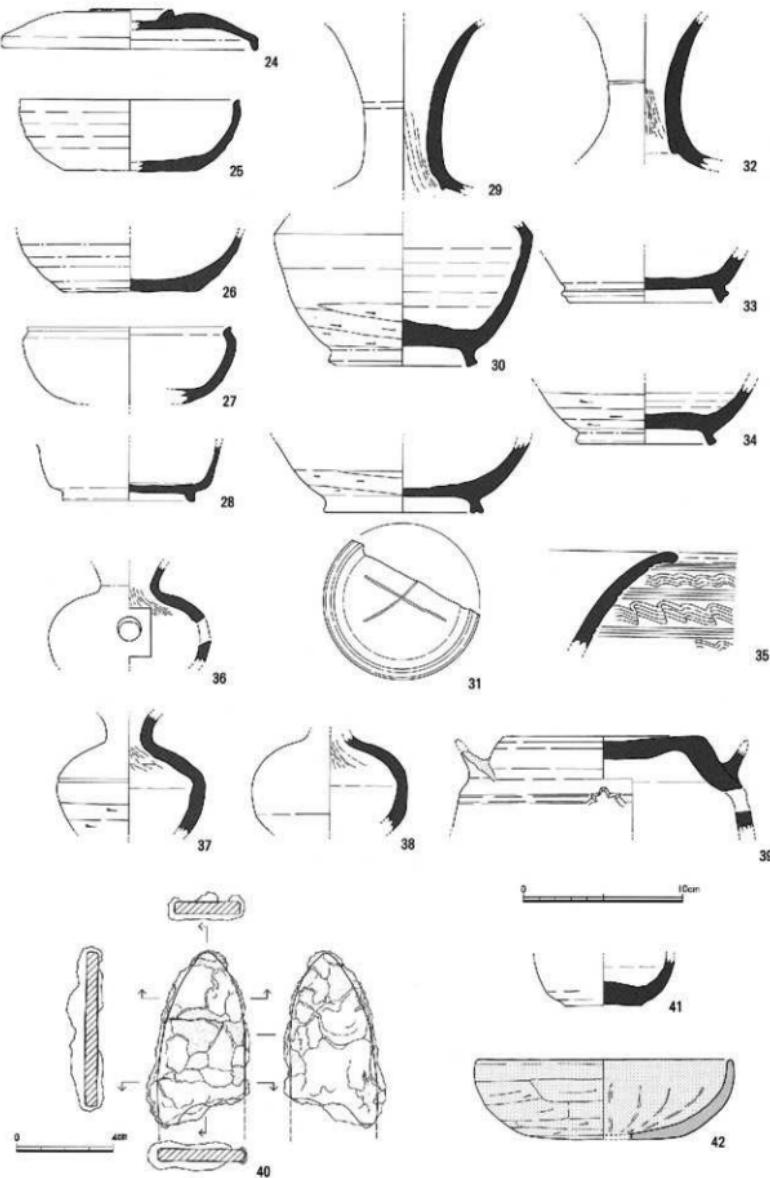


Fig.230 SD32 遺物実測図 (S = 1/3)

Fig.231 SD32・SD33 遺物実測図 ($S=1/3$ 、鉄製品は $S=1/2$)

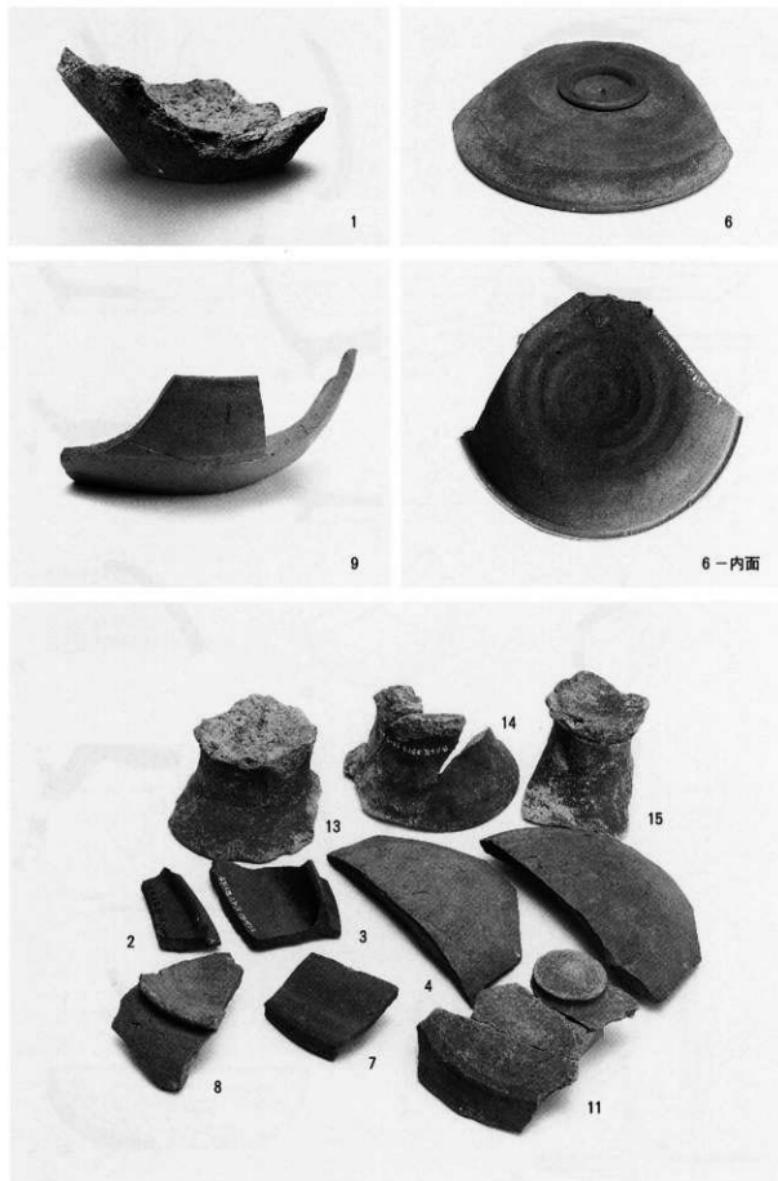


Fig.232 SD06 遺物写真①

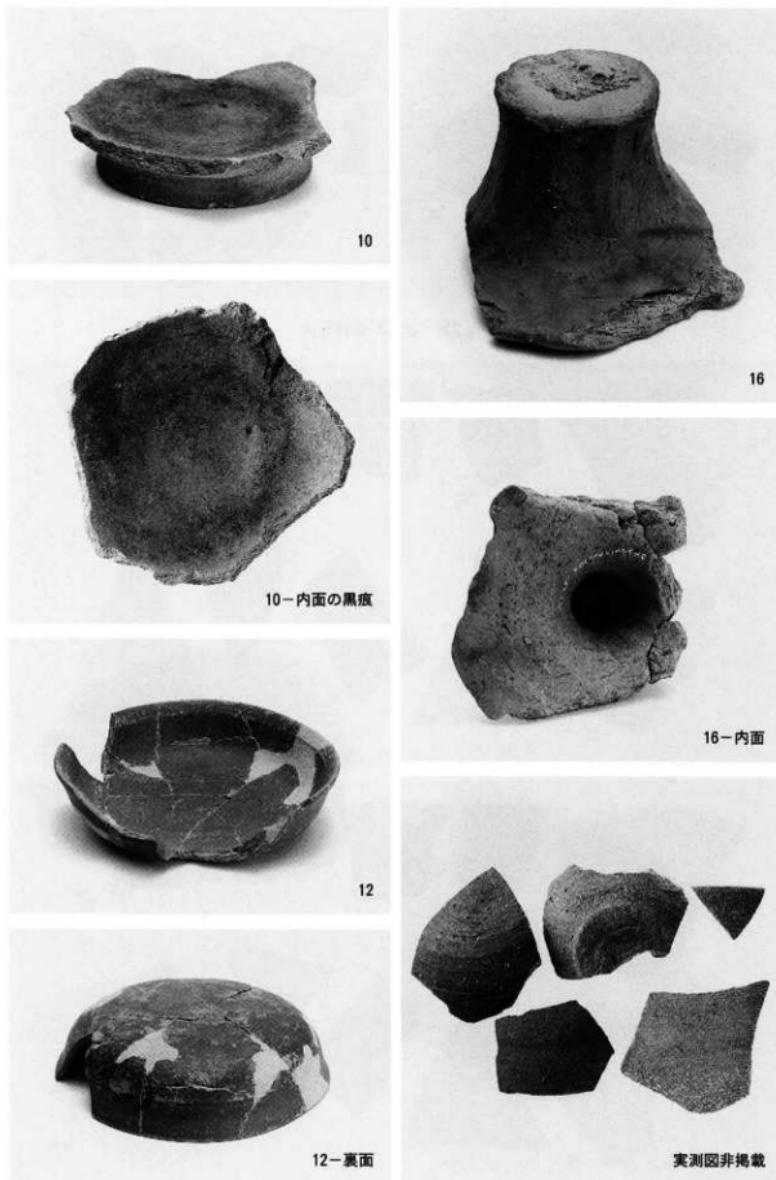


Fig.233 SD06 遺物写真②

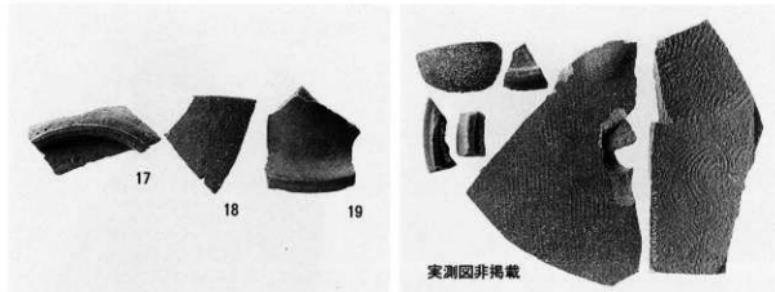


Fig.234 SD12 遺物写真

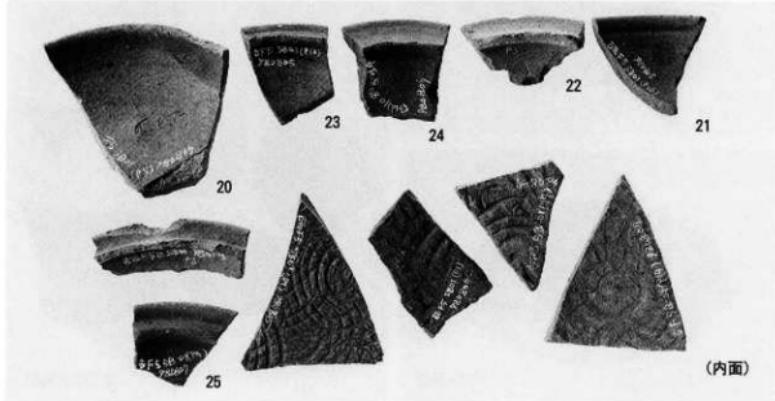
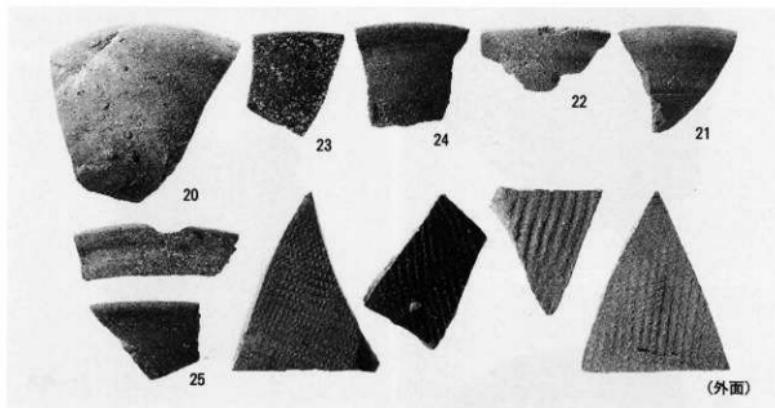


Fig.235 SB01 遺物写真

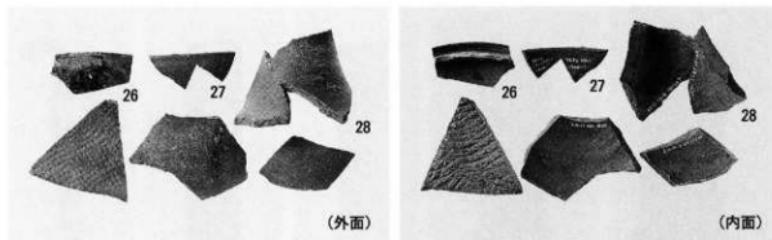


Fig.236 SA01 遺物写真

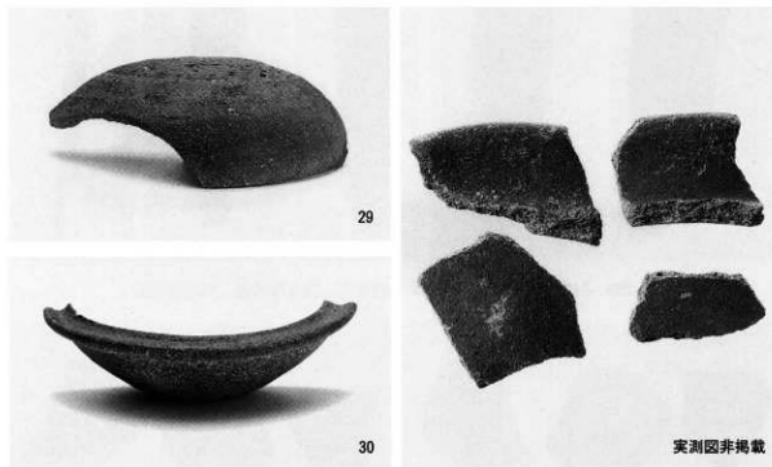


Fig.237 SB03 遺物写真

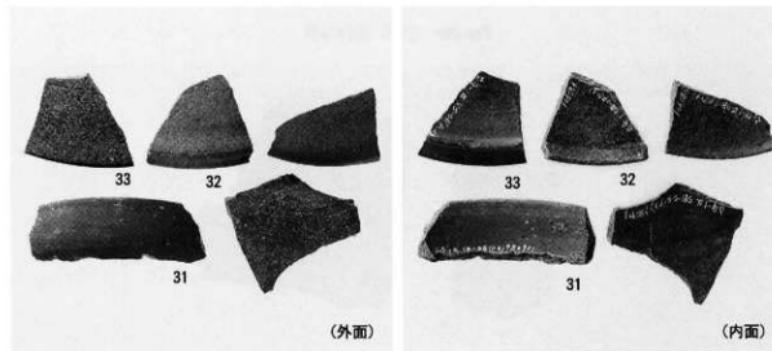


Fig.238 SB04 遺物写真①

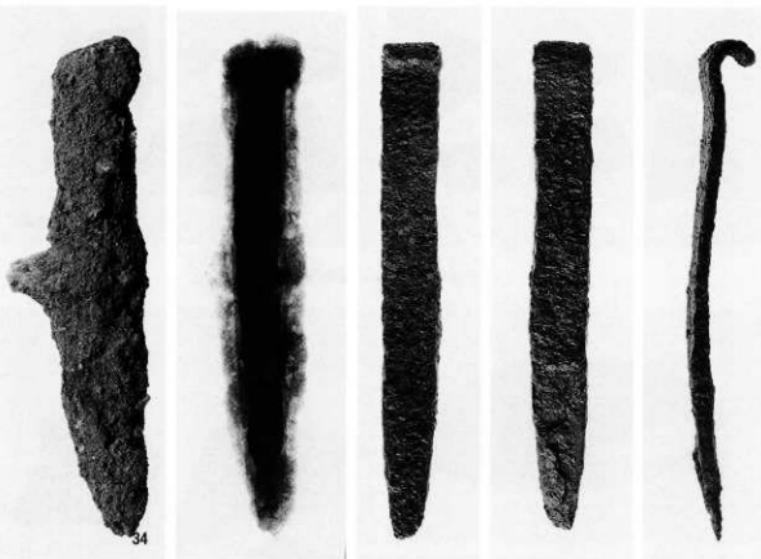


Fig.239 SB04 遺物写真②（左から処理前、同X線透過、処理後3面）

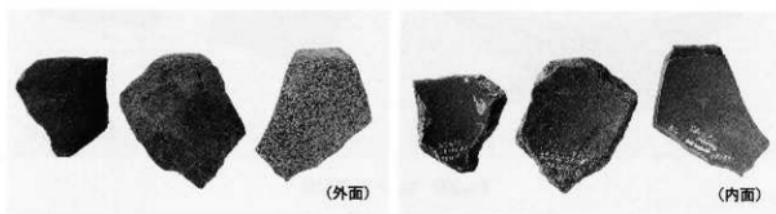


Fig.240 SB06 遺物写真

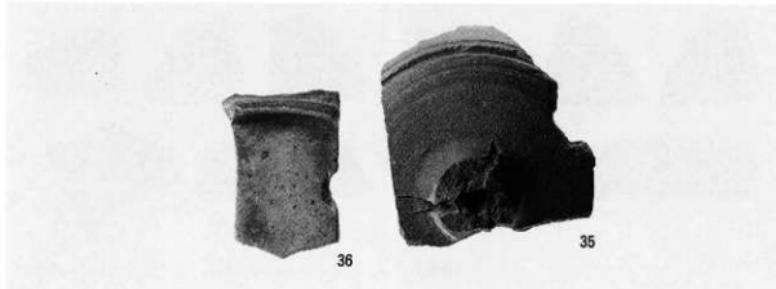


Fig.241 SB07 遺物写真

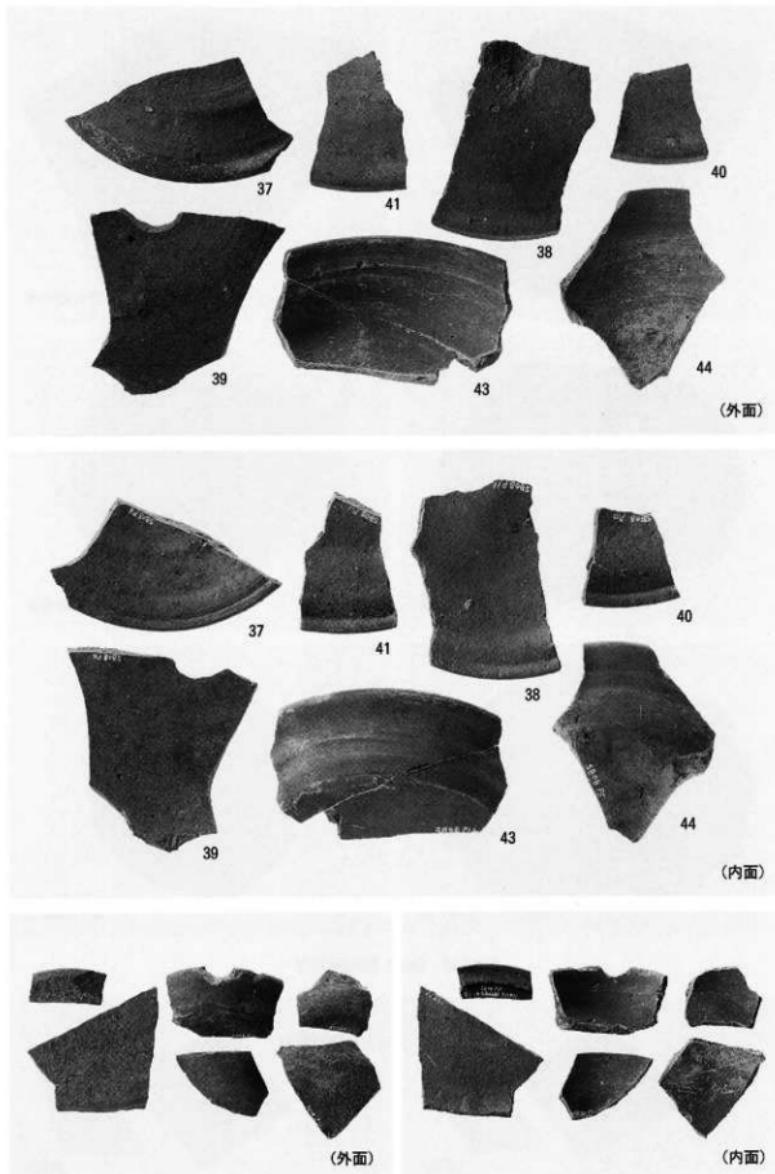


Fig.242 SB08 遺物写真①

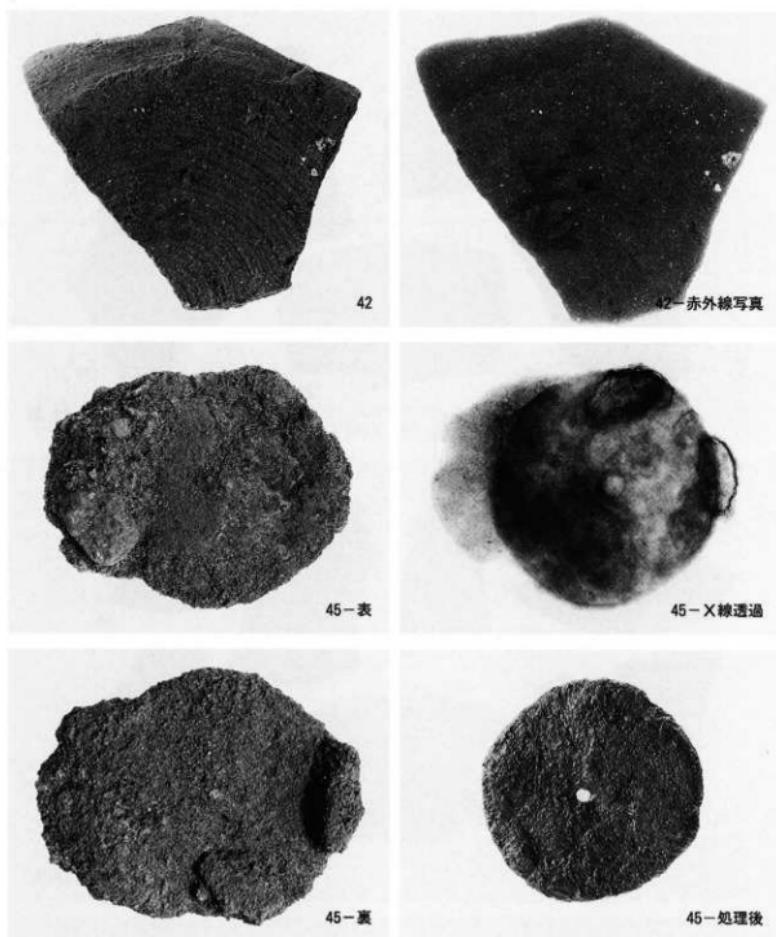


Fig.243 SB08 遺物写真②

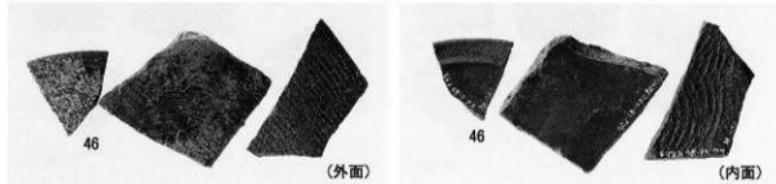


Fig.244 SB10 遺物写真①



Fig.245 SB10 遺物写真②

Fig.247 SB12 遺物写真

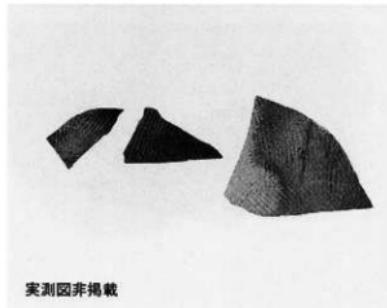


Fig.246 SB11 遺物写真



Fig.248 SB13 遺物写真

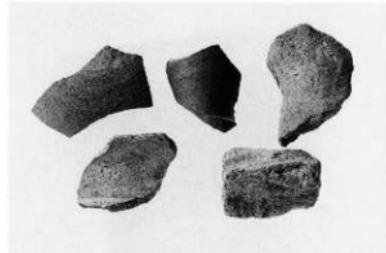
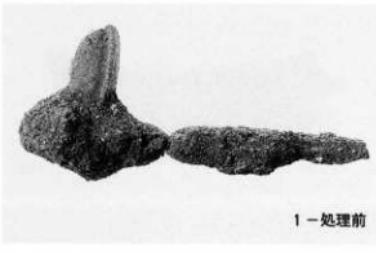


Fig.249 SB17 遺物写真



1 - 处理前

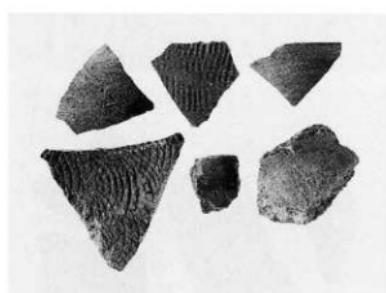


Fig.250 SB18 遺物写真



1 - 处理前

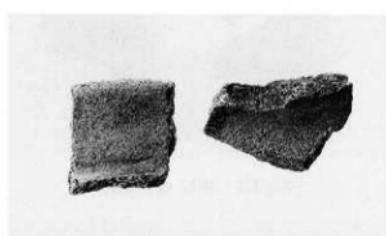
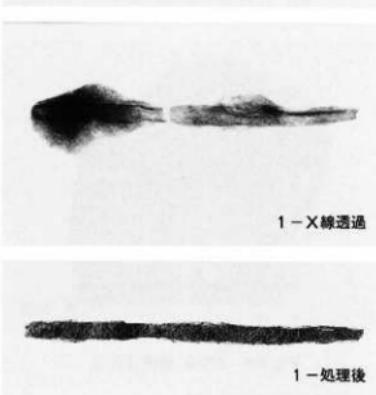


Fig.251 SB19 遺物写真



1 - 处理後



Fig.252 SD30 遺物写真①

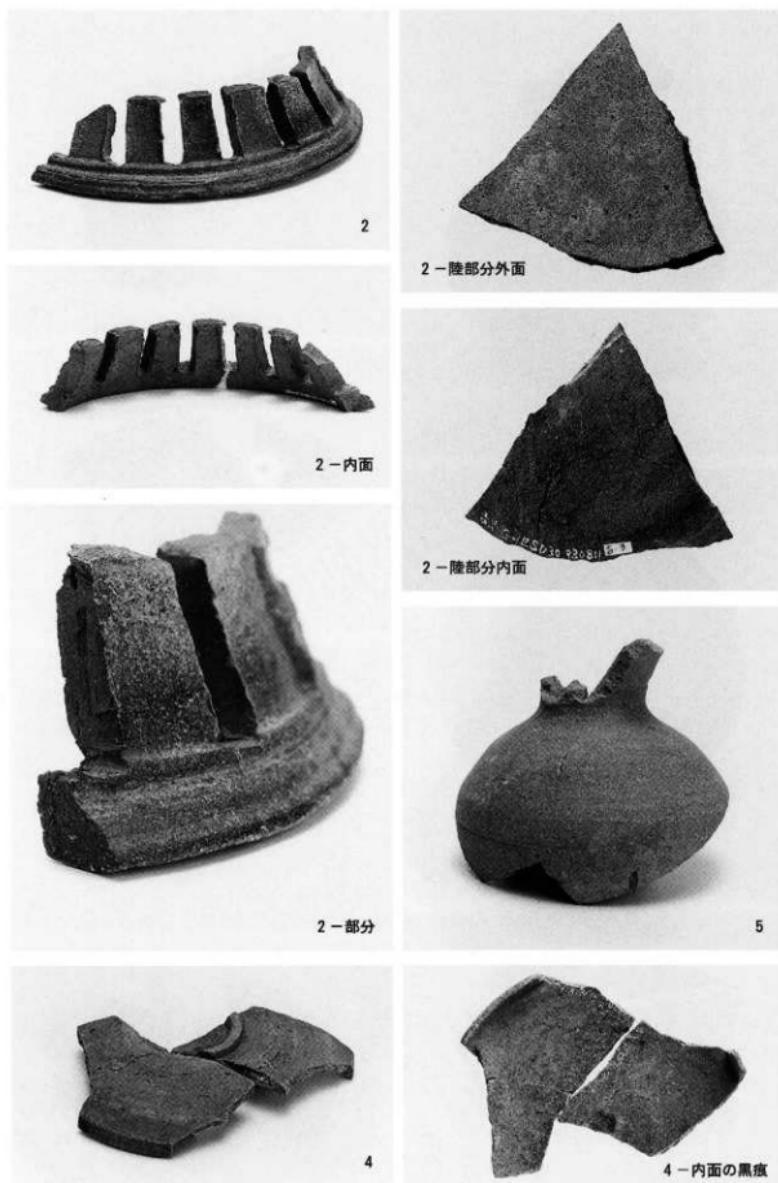


Fig.253 SD30 遺物写真②

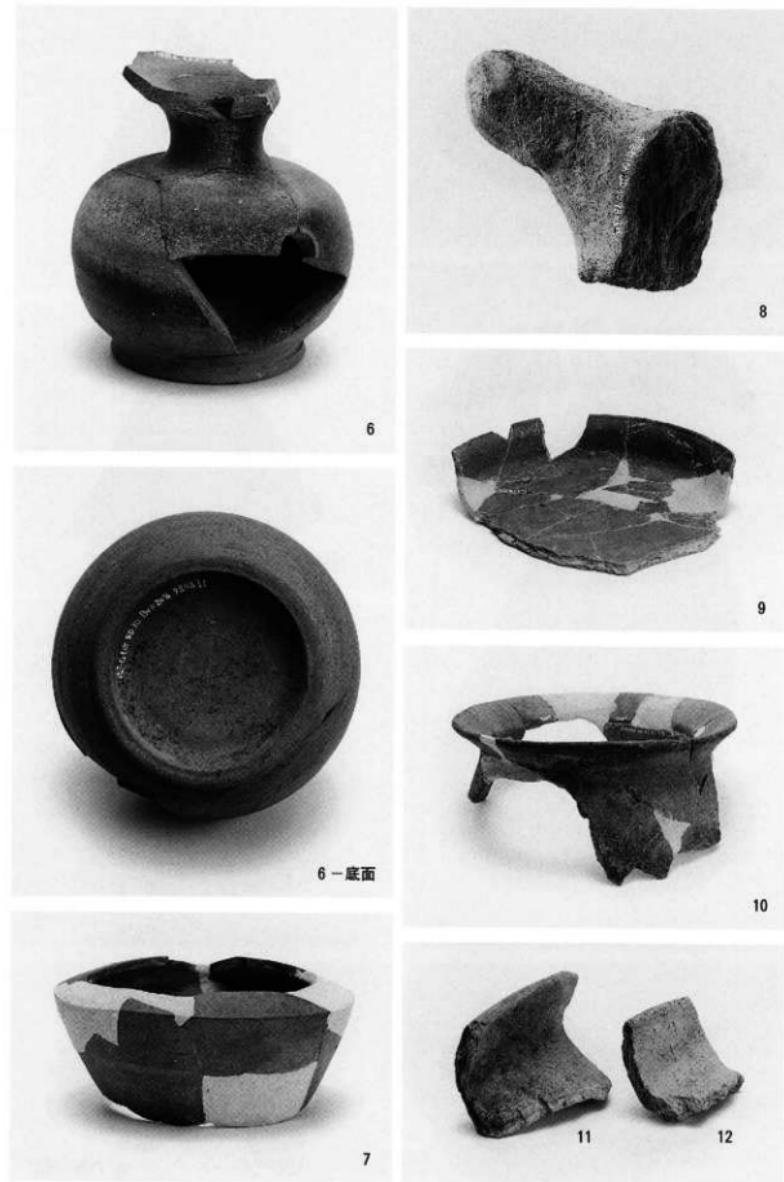
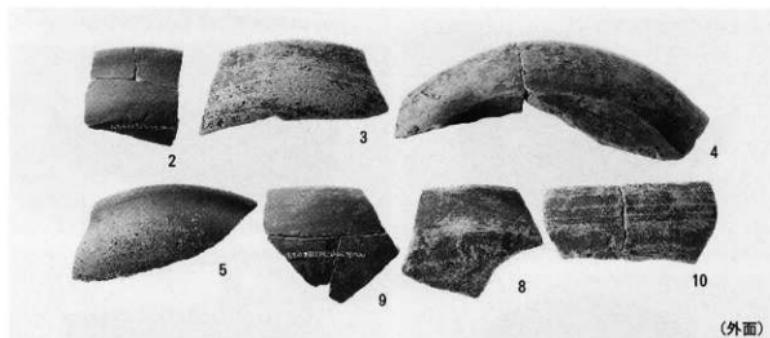


Fig.254 SD30 遺物写真③

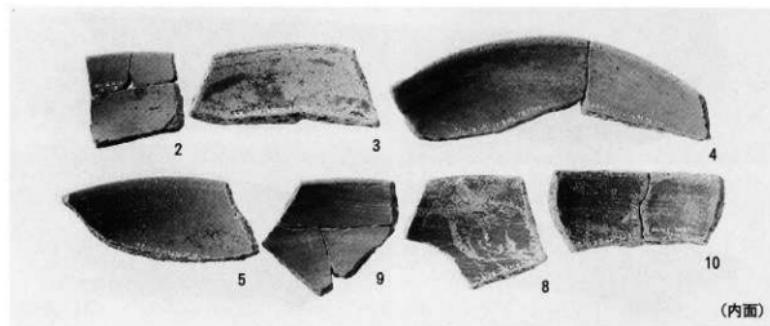


実測図非掲載

Fig.255 SD30 遺物写真④



(外面)



(内面)

Fig.256 SD32 遺物写真①

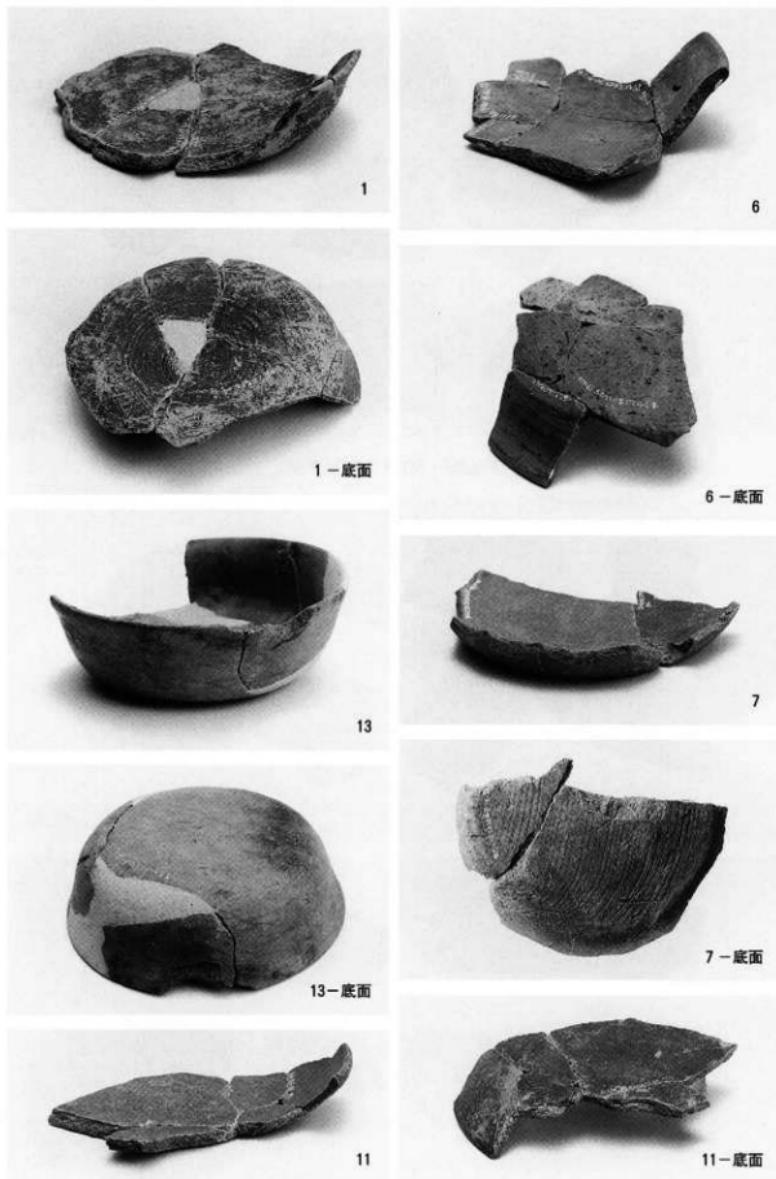


Fig.257 SD32 遺物写真②

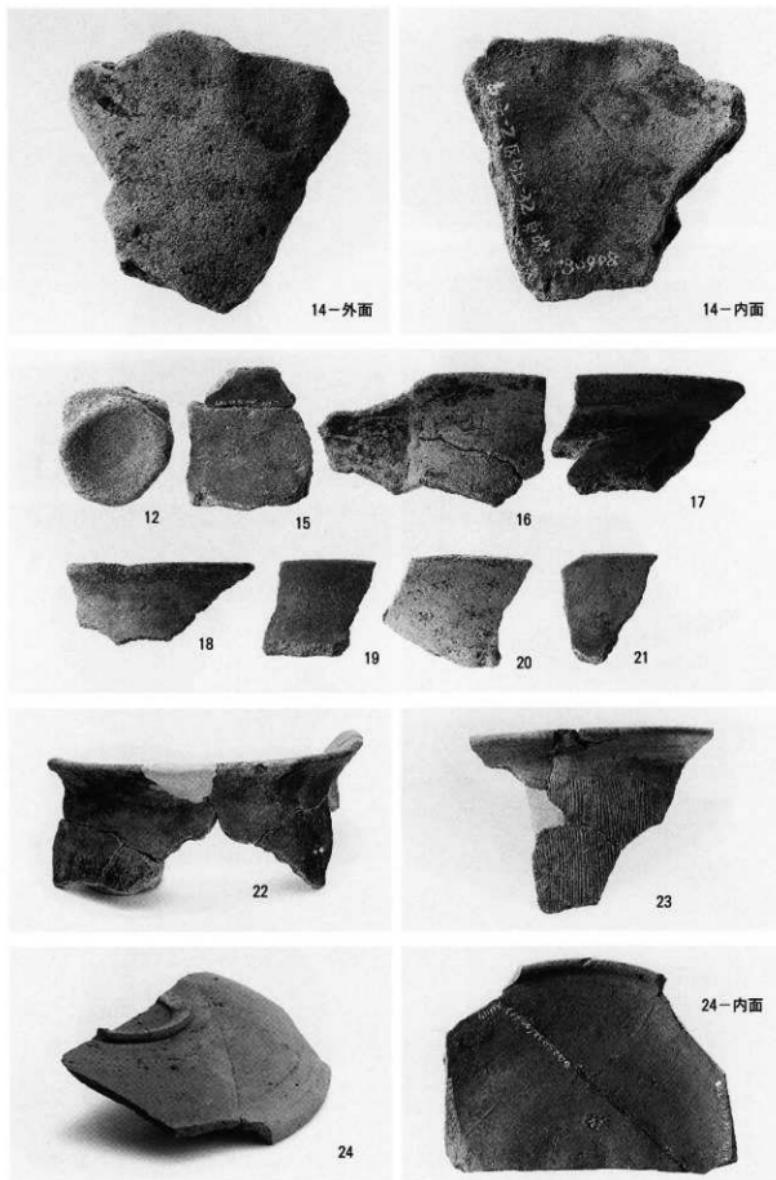


Fig.258 SD32 遺物写真③

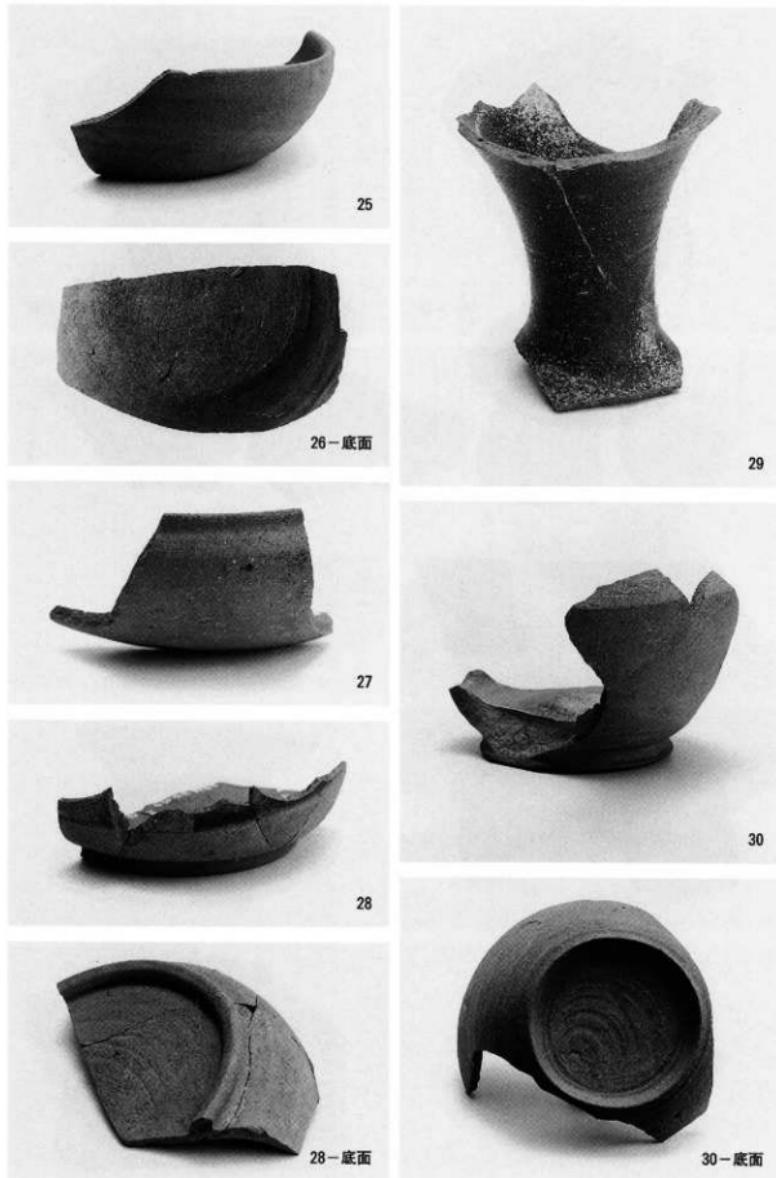


Fig.259 SD32 遺物写真④



31



33-底面



31-底面
ヘラ記号



34



32



34-底面



32-一体部との
接合部分



35

Fig.260 SD32 遺物写真⑤

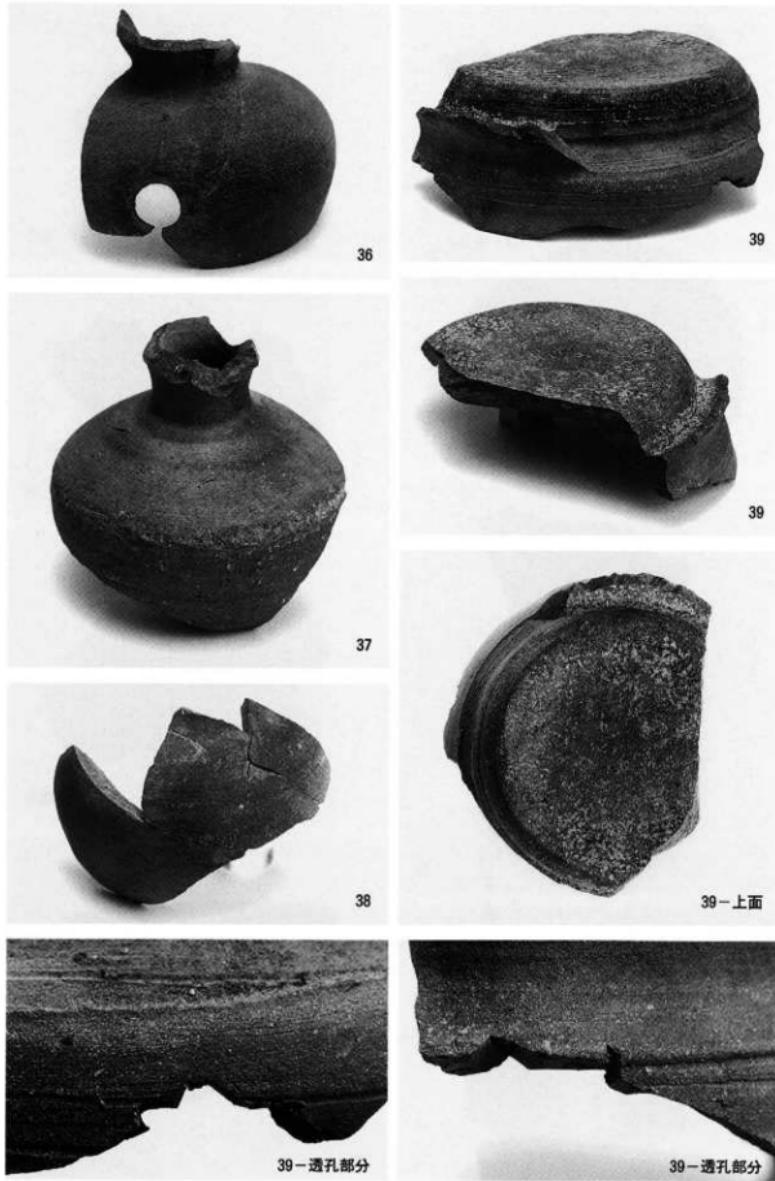


Fig.261 SD32 遺物写真⑥

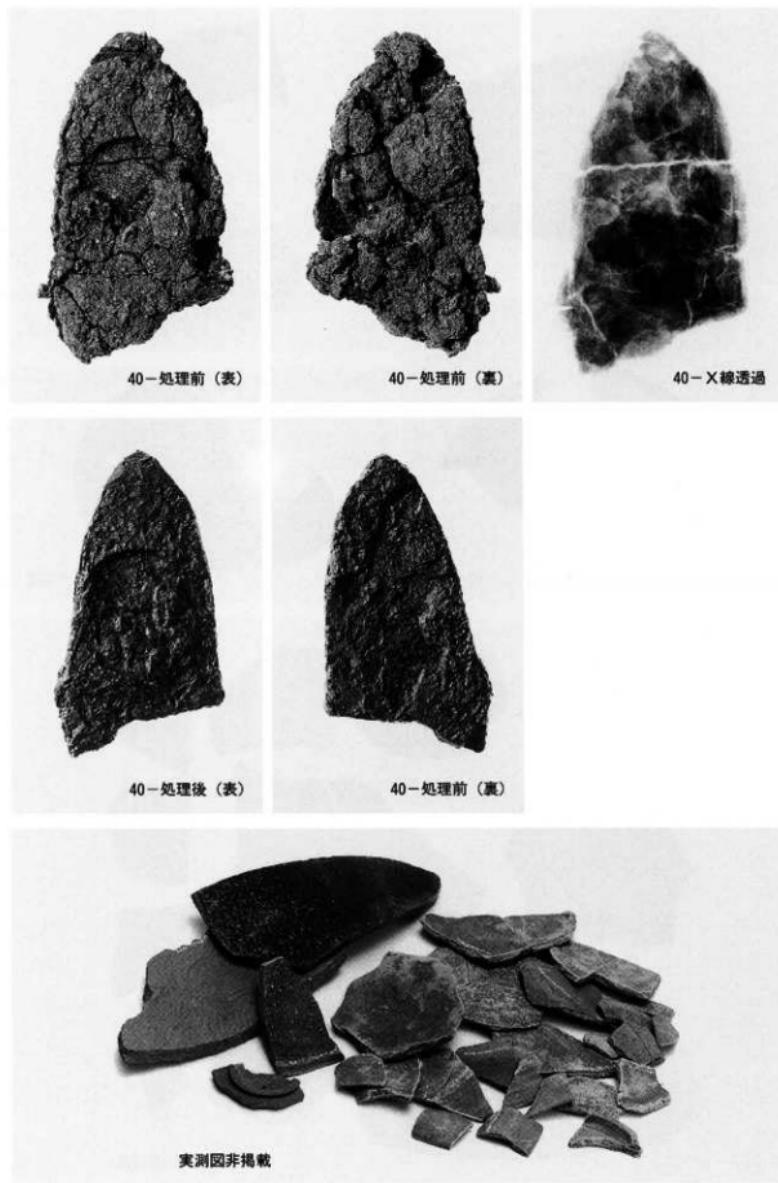


Fig.262 SD32 遺物写真⑦



41



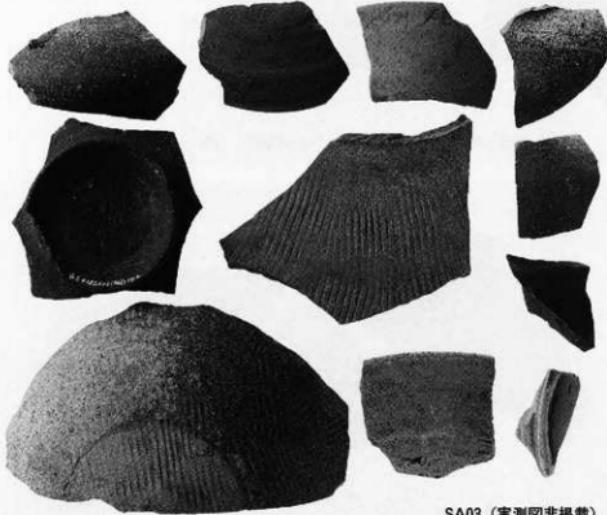
42



42-内面



42-外面



SA03 (実測図非掲載)

Fig.263 SD33・SA03 遺物写真

第4節 その他の溝・土坑

本節ではG区における他の溝と土坑について解説する。これらの溝と土坑からは硯や瓦などの特殊遺物が出土しており、前節までに詳細を述べた神門群と関連する建物群と深い関係が窺える。これらの土坑の中には建物柱穴が含まれる可能性があるが、柱並びなどは不明のため、ここでは土坑として扱った。調査区境界近くに位置するものについては、建物本体が調査区外にあるもの一部にあたる可能性もある。

1. SD30（遺構写真Fig. 264、遺物実測図Fig. 229、遺物写真Fig. 252～255）

（位置）G 1区の西寄りに位置する南北方向の溝跡である。調査区境界を流れる現在の水路に隔てられ、G 3区まで続いている（周辺図171）。G 3区では遺構面が深く削られているため溝は底近くがわずかに残るものである。また溝の北端は完全に削られており、途中で検出できなくなってしまった。この北側で西へ直角に曲がりF区のSD06と一連の溝となり、方形区画を作る溝である可能性もある（遺構位置図Fig. 170）。

（規模・方位）幅2m前後、検出面からの深さ最大で50cmである。溝の軸は見極めがたいが、方位はほぼ南北方位座標軸と一致する。

（遺物の出土状況）写真Fig. 264で示したように、溝の埋土の上層から底近くまで遺物が含まれている。

（遺物の内容）SD30の遺物については、前節で掲載している。円面硯など文字関連遺物が出土している。

2. SK449（遺物実測図Fig. 268、遺物写真Fig. 270）

G 2区南東隅、柵列SA03の内側に位置する土坑である。須恵器壊身1点が出土している。やや焼成が甘いもので、輪状つまみの形状から8世紀中葉のものとみられる。内面はつるつるに摩耗し、墨痕が付着する。転用硯として使用されたものである。

3. SK453（遺物実測図Fig. 268、遺物写真Fig. 270）

大型建物SB11の北側に掘られた土坑である。須恵器壊身1点が出土している。

4. SK458（遺構図Fig. 266、遺構写真Fig. 267、遺物実測図Fig. 268、遺物写真Fig. 271）

G 2区南壁沿いで確認された土坑である。大型建物SB12の内側に位置している。掲載した遺物は1が弥生前期頃の甕、2が弥生後期初頭頃の甕で两者とも混入である。3は円面硯の上端部分で、海部に貼り付けた部分から剥離している。4は平瓦の破片で、端部一面以外はすべて破面である。外面には縦目のタタキ痕、内面には布目痕が残る。内面には横骨痕とみられる段差が観察される。成形方法は布目織維の方向が斜行する点から桶巻き作りの可能性もあるが、湾曲がゆるやかで一枚作りの特徴も備えており断定できない。全体に色調が明橙色を呈して焼成が甘い点は新しい様相といえるが、小片のため断定できない。

5. SK459（遺構図Fig. 266、遺構写真Fig. 267）

SB12の柱穴を切っている。径120cmの正円形で、深さ70cmほどである。下層は単一の埋土で満たされるが、上層部分からは礫が集中して出土した。この中には比較的平坦な面をもつ大きめの石も含まれている。平面形が整っていることから礎石設置のための根石を含む地行の可能性も考えられるが、断定はできない。下層については柱痕など無く、掘立柱からの建て替えの可能性もあるが不明である。遺物は出土していない。

6. SK460（遺構図Fig. 266、遺構写真Fig. 267、遺物実測図Fig. 268、遺物写真Fig. 272）

SB12の柱穴を切っている。差し渡し最大で130cm、不定形の土坑である。最上面に拳大的な亜円礫が多数集中して置かれていた。これも礎石根石の可能性が考えられる。下層については分層できない单一の埋土で、柱痕などは一切認められない。

遺物はFig. 268に示したように赤彩土師器の壺などが出土している。

7. SK474（遺構図Fig. 266、遺物実測図Fig. 269、遺物写真Fig. 275～276）

方形区画に伴う柵列SA03の内側に接して設けられた上坑である。Fig. 266に示したように2つの土坑が連結したような構造をもつ。東側はやや浅く、40cm大の大型の角礫がまばらに混じる。石上面の傾きはまちまちで、面をそろえてある訳ではない。東側はこれを切っているように観察され、やや深い。東側にあるような大型の石は含まれず、10～20cm大の亜円礫がほぼ水平に敷かれる。礫と十層の状況からみて磁石根石である可能性も高いが、断定することはできない。

遺物は主に東側の浅い部分から出土している。Fig. 269に示したように、やや特殊な性格をもつ須恵器が出土している。1は環蓋の転用鏡で、内面に墨痕が残る。3は大型の盤で中央が反り上がっている。4は器種不明である。大型で浅い器形に復元される。肩部に強い稜がつき、口縁部は外反しながら外に向く。端部にはしっかりとした面がつくられている。盤の可能性もあるが、その場合底面にあたる部分が曲面をもっており安定しない。高台の痕跡も無い。したがって大型の蓋と考えて図示した。5は円形の平面形をもつ鏡である。手捏ね成形された脚が1箇所に残り、これと対応する別の脚の刺離痕が1箇所確認できる。口縁の傾きが均一でなく若干聞くように観察されるため、完全な平面円形ではなく風字硯状になる可能性もある。残った脚の底面はわずかに傾きがあるようであり、これが全体の傾きを反映したものと推定して図示した。内面には黒色の墨痕が濃く残り、つるつるに摩耗している。底面には黒色の墨痕は無く、赤色顔料の付着が認められた。いわゆる「朱墨」といわれるものである。底面は粗い不定方向のナデで調整され、やや表面調整が粗いせいか焼成時のひび割れを生じている。このひび割れにも顔料は入り込んでいる。顔料は特定の文字を記したものではなく、また顔料を塗ったような器壁表面の摩耗も認めら

れない。顔料を水溶する顔料皿のような用途が考えられる。顔料の成分は蛍光X線成分分析によって酸化鉄に由来するベンガラであることが判明している。なおこの成分分析の結果と、当遺跡山上の硯について次章でまとめている。

8. SK478（遺物実測図Fig. 268、遺物写真Fig. 273）

SB11の北側に位置する土坑である。埋上中から円面鏡の脚部破片が山上している。部分的な破片のため全形は不明であるが、十字形と半円形の透かしを交互に配したものとみられる。

9. SK483（遺構図Fig. 266、遺構写真Fig. 267）

G2区の南壁沿いに位置する。遺構の半分は調査区外にかかっているため全体は不明である。長径130cm、深さ50cmの円形土坑である。埋上中には5～10cm大の円礫が含まれている。礫の垂直分布にはまとまりがなくまんべんなく含まれている。遺物は無い。

10. SK501（遺物実測図Fig. 268、遺物Fig. 274）

溝と柵列による方形区画の内側に位置する。SB13と重複し、SK501がこれを切っている。宝珠状つまみをもつとみられる須恵器壺蓋1点が出土している。

Tab. 40 G区土坑出土遺物 観察表 (実測図Fig.268~269、写真Fig.270~276)

遺物名	番号	種別	器種	法 直(cm)		色 異	観 察 (内面/外面/特記)	残 余 度	
				口径	底高				
SK449		灰陶器	灰 葵 (直筒)	-	-	内外面：薄灰色 底：灰黑色	内面：回転ナメ、外面側面部に回転ナメによる段／内面堅厚で中央に帯窓有	全体の60%	
SK450		灰陶器	环 身 11.8	-	-	内外面：灰白色 底：灰黑色	内面：回転ナメ、口縁部回転ナメによる成形わずかに欠陥する	口縁回辺のみ、全周の40%	
1	灰陶器	葵	-	-	-	内外面：灰白色	内面：サコハケ、コ輪転打等なナメ／外面：タヂハケ、回転ナメ	全周の5%	
2	灰陶器	葵 (31.0)	-	-	-	内外面：淡青褐色	内面：横斜以下不定方向のナメ、下部ナメヘド、口縁部コナメ／外面：コロナメ、コ鉢部3条の凹線、胃部斜め方向割れに成形等の凹痕	G部のみ、全周の10%	
3	灰陶器	直身	27.6	-	-	内外面：明灰色	内面ナメ、表面に強い沈線と高分	全体のみ、全周の20%	
4	瓦	半 瓦	-	-	-	内外面：半地角	内面：布目模、滑青板を残す 外面：薄タクチ納	両端を含む小片	
1	土器	葵	15.4	4.2	10.8	内外面：淡青色 外側：赤色豊	内面：回転ナメ、底部不定方向のナメ	全体の20%	
2	土器	环	-	-	-	内外面：灰白色	内面：回転ナメ 内面：放射状の浮文、底部：ヘラケズリ	全体の15%	
3	土器	环	-	-	-	内外面：灰白色	内面：サコハケ	全体の10%	
4	灰陶器	葵	-	-	-	内外面：淡青色 外側：赤色豊	内面：回転ナメ／外面：沈線、波状文	内端部の小片	
1	灰陶器	不 追 (14.9)	-	-	-	内外面：明灰色	内面：回転ナメ／外面底部に列転ヘラケズリ／内面：全周に横筋	全体の20%	
2	灰陶器	不 葵	-	-	-	内外面：明灰色 外側：半地角	内面：回転ナメ	G部のみ、全周の20%	
3	灰陶器	盆	25.2	1.6	18.1	内外面：灰白色	内面：回転ナメ／内面使用により岸折	全体の30%	
4	灰陶器	葵	22.3	(3.1)	-	内外面：粘土質灰陶 形状に剥離有	内外面：回転ナメ	全体の30%	
5	灰陶器	円筒形	-	-	-	内外面：暗灰色	内面、外面底面：回転ナメ／底盤：不定方向のナメ、焼成時のひび割れ、手捻り成形の跡1箇所後段行／脚割離移行所／門型開口部後段行有、後用により埋札、光沢、底面：木蓋（ベンダラ）付	全体の40%程度	
SK478		灰陶器	内面鏡	-	-	(22.4)	内外面：灰白色	内面：回転ナメ／外面：1条の沈線、十字形と半円形？の透かし	罐蓋のみ、全周の25%
SK491		灰陶器	环 葵	12.7	-	-	内外面：灰白色	内面：回転ナメ、底盤はまみ倒錐底	全体の20%



Fig.264 SD30 遺構写真（1：北西から、奥はSB03、2：北から、円面鏡等の出土状況）

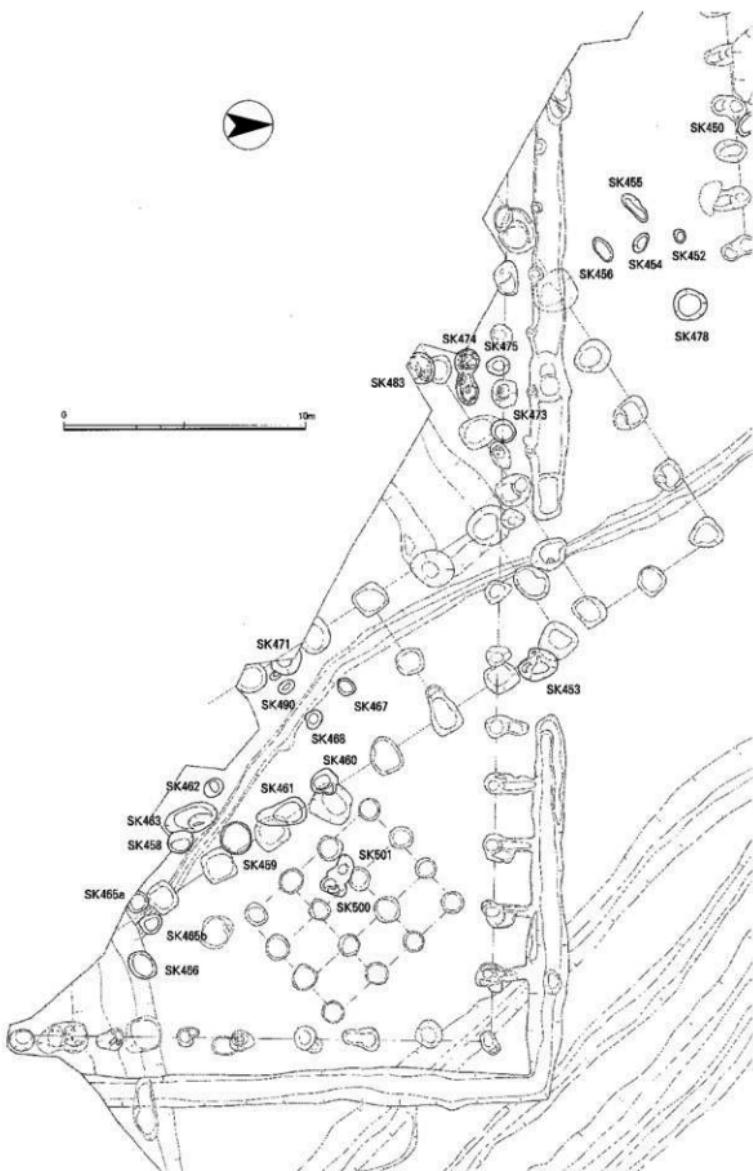


Fig.265 G区 建物に伴わない土坑位置図 (S = 1/200)

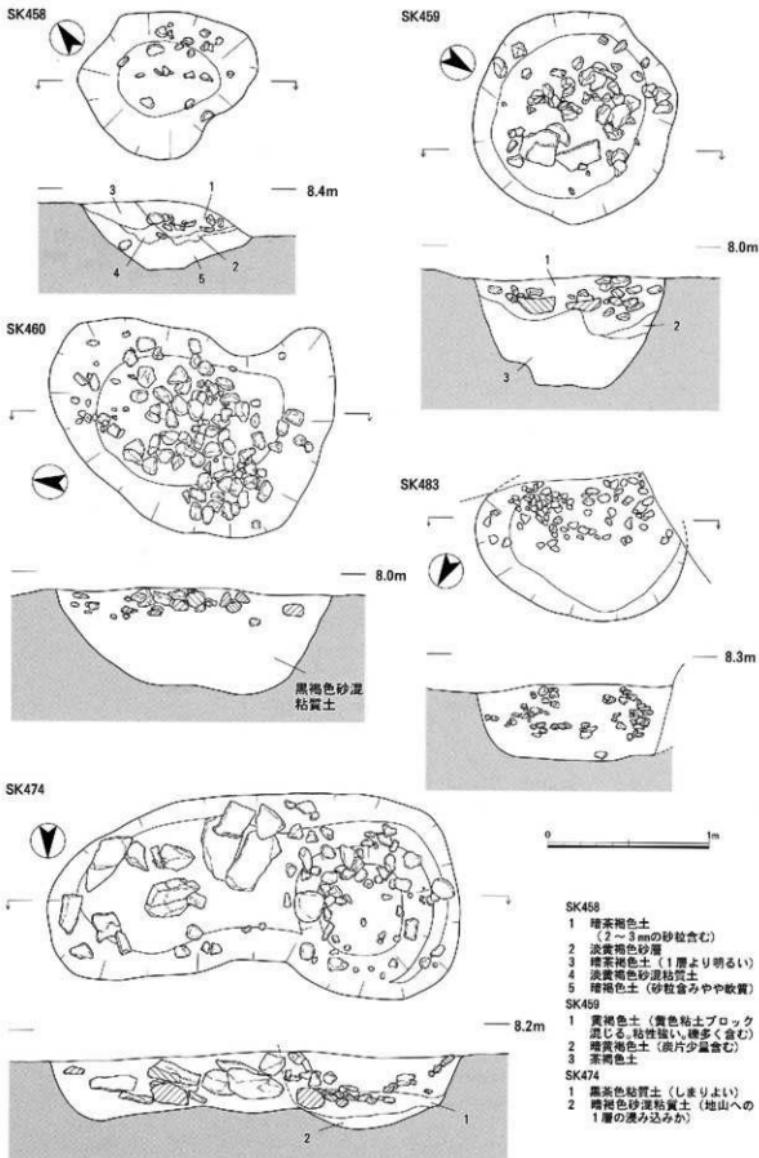


Fig. 266 G区奈良時代土坑 遺構実測図 (S = 1/30)

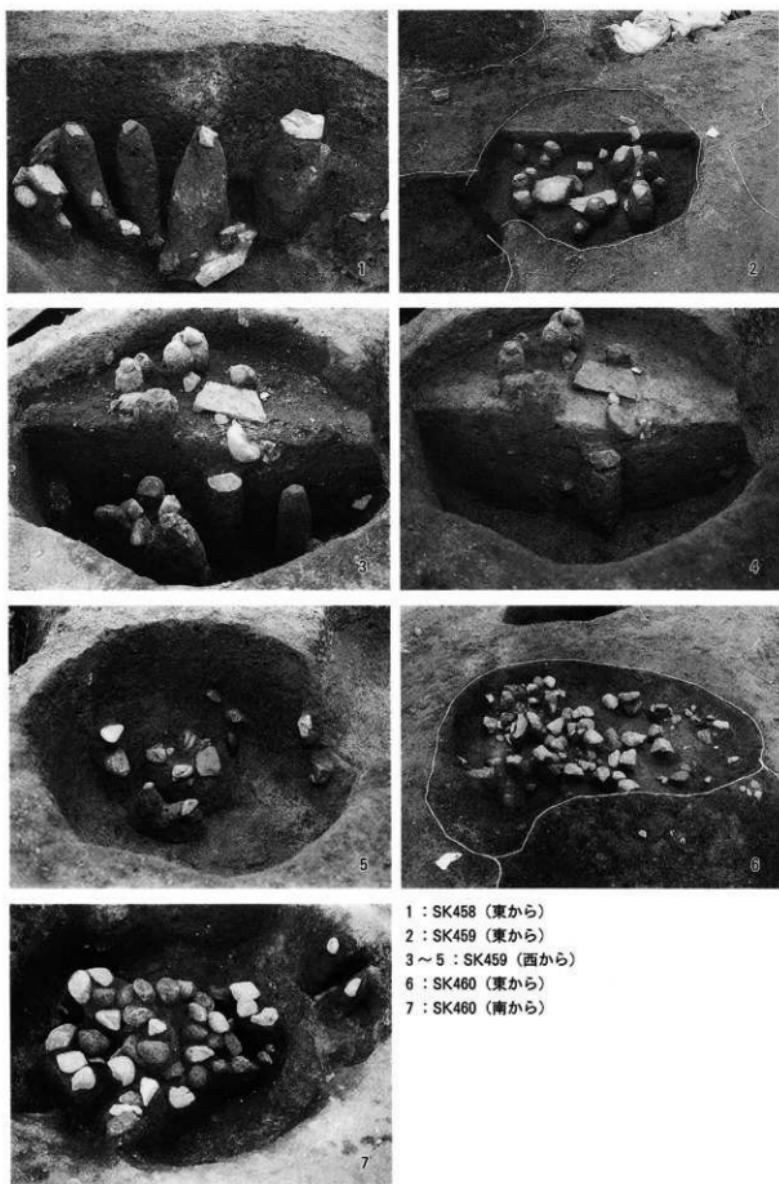


Fig.267 G区奈良時代土坑 遺構写真

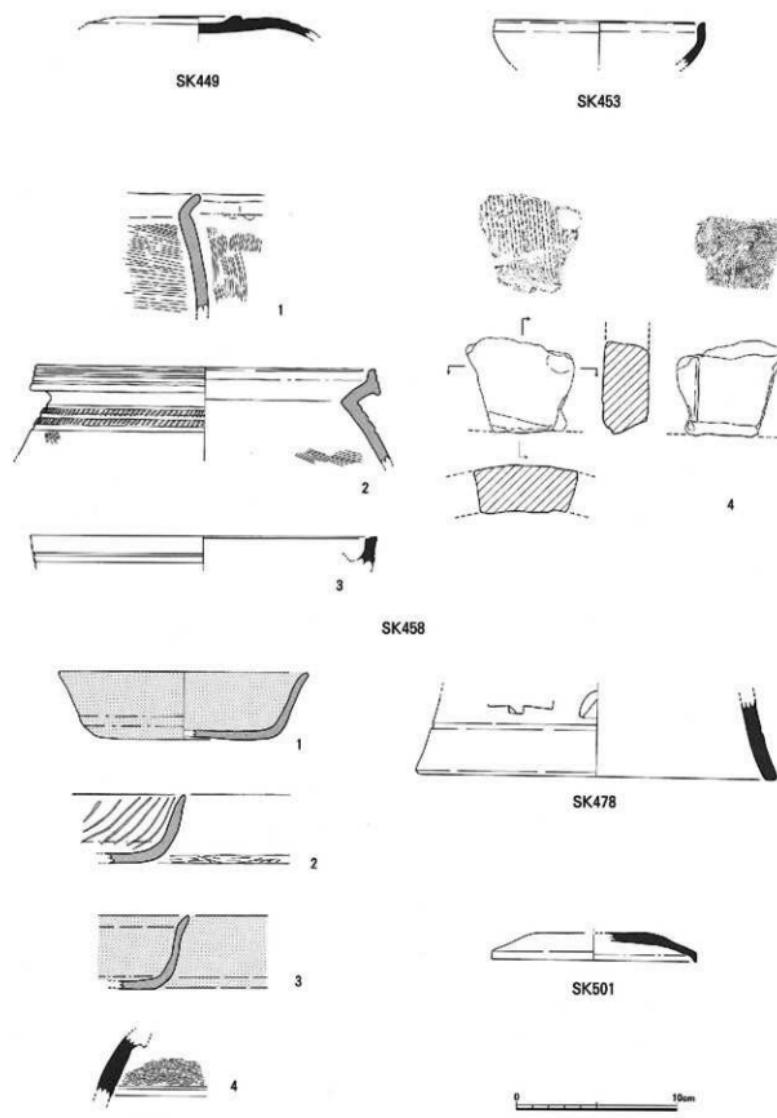


Fig.268 土坑遺物実測図① (SK449・453・458・460・478・501) (S=1/3)

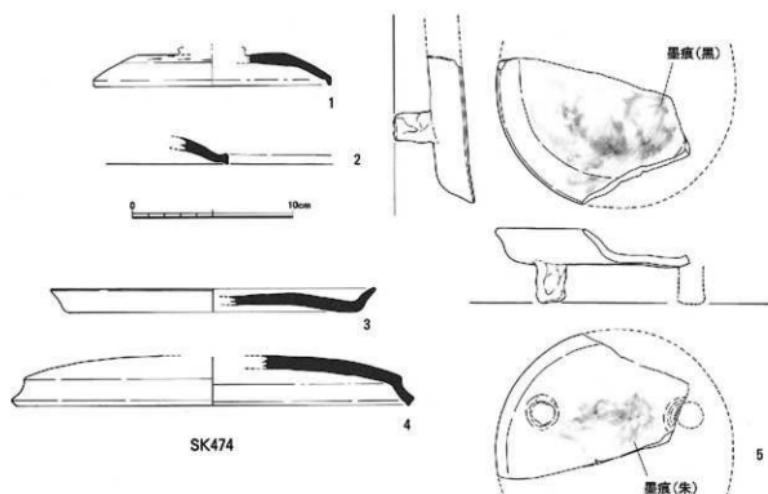


Fig.269 土坑遺物実測図② (SK474) (S=1/3)

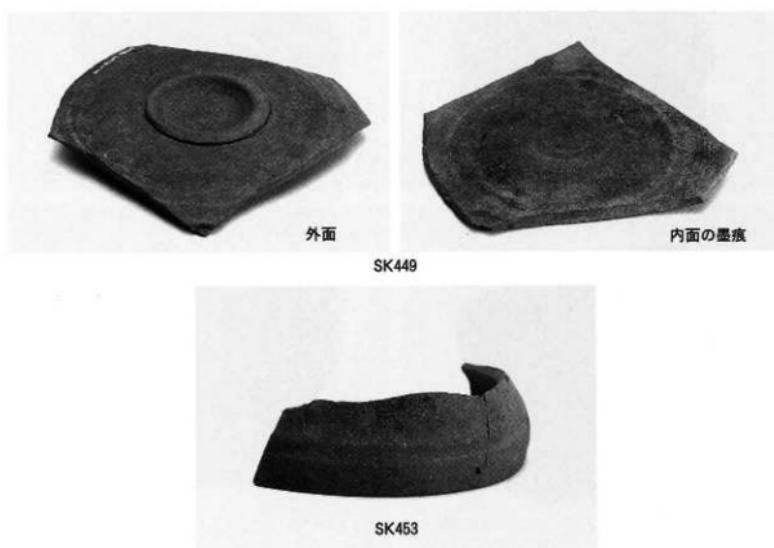


Fig.270 土坑遺物写真① (SK449・453)

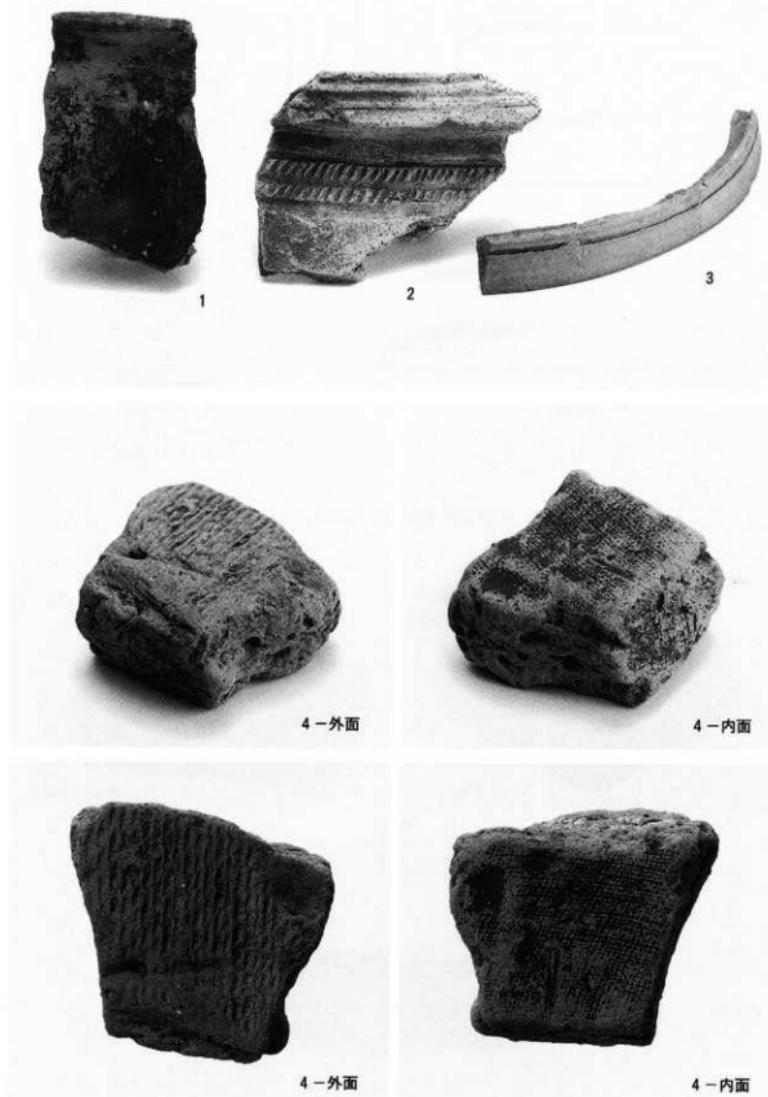
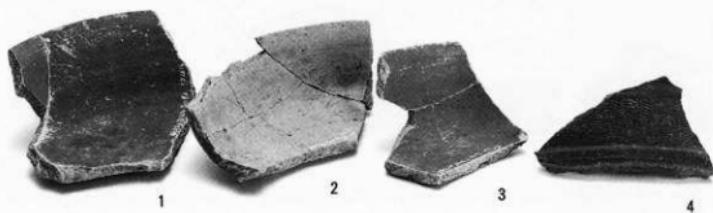


Fig.271 土坑遺物写真② (SK458)



同上 - 反対面

Fig.272 土坑遺物写真③ (SK460)



Fig.273 土坑遺物写真④ (SK478)

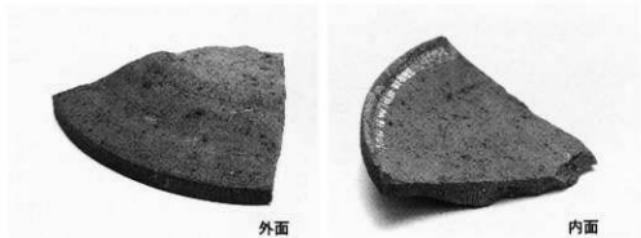


Fig.274 土坑遺物写真⑤ (SK501)

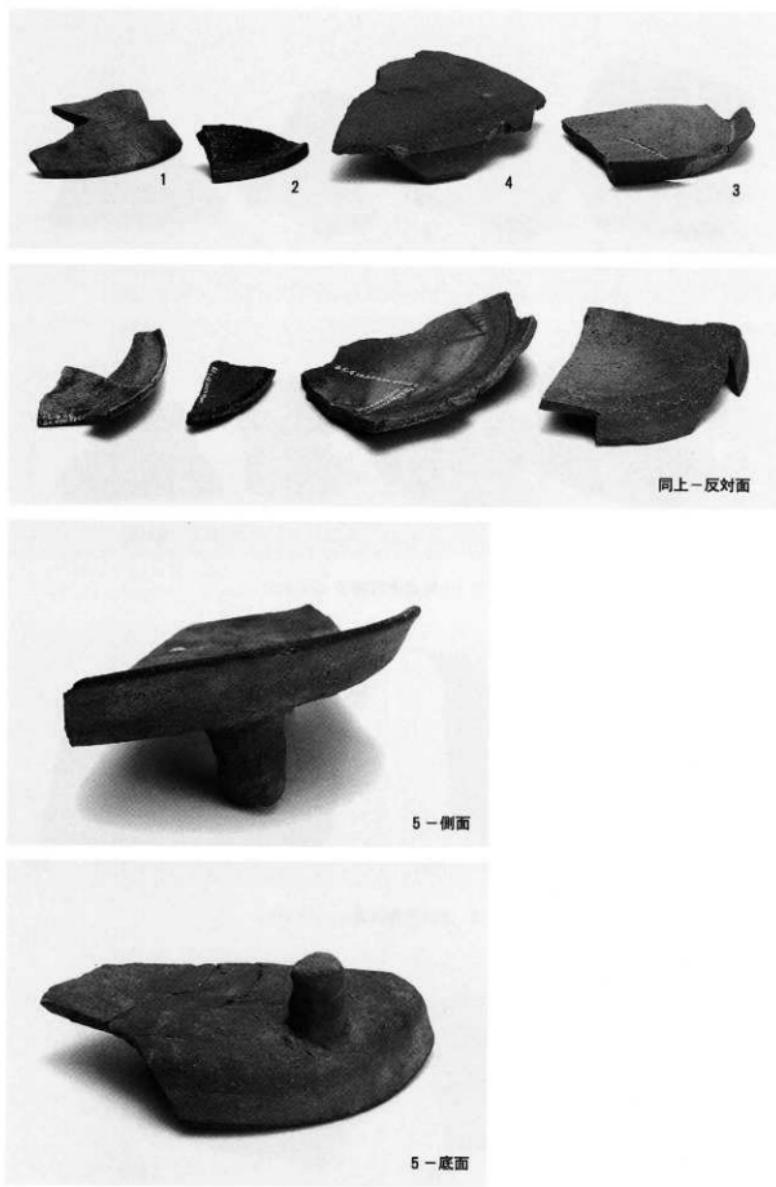
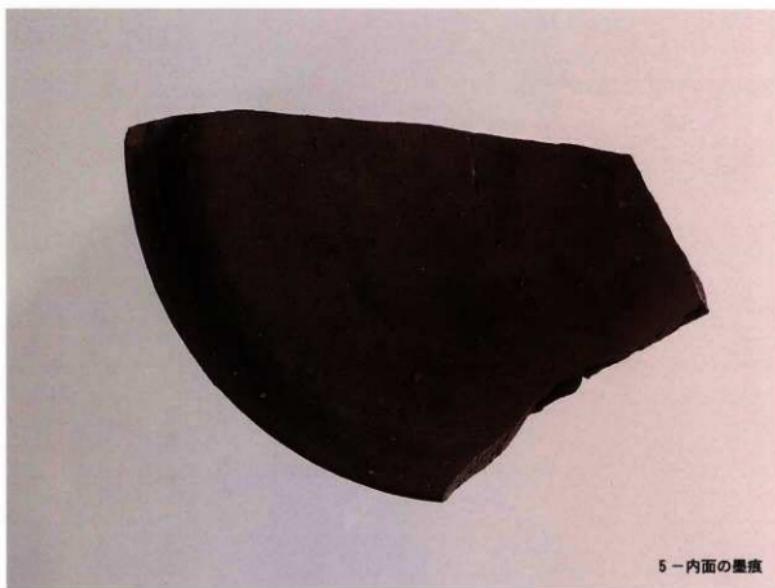


Fig.275 土坑遺物写真⑥ (SK474)



5-内面の墨痕



(ほぼ実寸大)

5-外面の赤色顔料痕

Fig.276 土坑遺物写真⑦ (SK474)

第8章

鍛冶関連遺物の調査

章8 葵

百福の御遺重関台野

第8章 鍛冶関連遺物の調査

第1節 出土状況と内容

1. 鍛冶関連遺物の出土状況

鍛冶に伴う遺物はF区東側に位置する掘立柱建物(SB01)の周辺から集中して出土した。出土遺構の分布はFig. 277に示した。遺物の総数254点、総重量は6526.4gで、出土遺構と遺物内容はTab. 42 (p. 299)に示している。SB01の周辺にある上坑(SK197、SK304など)からの出が最も多く、次いでSB01の柱穴や、これを囲む区画溝の埋土からも出土している。

近世以降の耕作等によって古い遺構面は大きく削られてしまい、炉跡や焼土面のような作業面に伴う遺構は全く残されていなかった。従ってこれらの遺物がどこから供給されたものかは厳密には不明である。掘立柱建物SB01が鍛冶工房である可能性も考えられるが、SB01の柱穴(P15)に切られる上坑(SK491)からも鍛治滓が出土しており断定はできない。少なくともSB01が建つ以前から周辺で鍛冶が行われていたことは明らかである。

鍛冶作業と直接関わるものでは無いが、鍛治滓を多く包含している土坑SK304は、遺物量の多さから見て操業と同時に存在していた可能性が考えられる。ただし用途は井戸等と想定され、施設・埋め立て時に周辺に多く存在した鍛治滓が混入したものであろう。

2. 鍛冶関連遺物の時期

操業時に存在していた可能性があるSK304からは6世紀後葉(出雲3期、TK43型式併行期)の須恵器が少量出土しており、鍛冶が行われた時期はこれをさかのぼらない。一方SB01とこれを区画するSD12がともに8世紀中頃には施設・埋没したことから、これが年代の下限を示すものと判断される。したがっ

て当遺跡における鍛冶の年代は、出土状況から判断すれば6世紀後葉～8世紀中頃ということになる。

第2節 調査の方法

1. 調査の手順

まず初めに、出土した全資料について考古学的な分類をおこなった。分類基準は出土遺構別・強力磁石(TAJIMA PUM-P)による磁性・小型特殊金属探知器によるメタル度・肉眼観察による形態などである。分類後に個体数と重量の集計をおこないTab. 42にまとめた。次に、その中から工程や各遺構の機能や環境を端的に示す代表的な資料47点を選別した。これらを遺構・種別ごとにまとめたものがFig. 281の構成図である。またこれらの法量、磁性度、メタル(残存)度を計測し、外観観察による所見を加えた一般観察表をTab. 43～45に示した。上記の資料47点については実測図作成と写真撮影を行いFig. 282～295に掲載している。

さらに、この中から金属学的分析が必要なもの11点を分析資料として選別し、分析前に詳細な外観観察を行った(Fig. 296～306)。これらは川鉄テクノリサーチ株式会社に委託して自然科学的分析調査を行い、その結果を第9章に掲載している。

上記の調査方法や金属学的分析の方法・項目について、六澤義功氏(たたら研究会委員)に全面的な指導を受けた。さらに資料分類や外観観察、観察表作成などについては調査指導の際に直接作業の労をとっていただいた。

2. 遺物観察表の見方

遺物観察表は新潟県北沢遺跡⁽¹⁾・島根県板屋Ⅲ遺跡⁽²⁾における製鉄関連遺物の検討で

(1) 新潟県農水省教育委員会 1992 『北沢遺跡群』

(2) 島根県教育委員会 1998 『板屋Ⅲ遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 5

採用された様式を基本とし、分析項目欄などを加えたものである。主な項目の示す内容は以下のとおりである。

(1) 遺物種類・遺物名

金属学的分析を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。

(2) 計測値・法量

各遺物の長さ・幅・厚さ・重量を計測したものである⁽¹⁾。

(3) 磁着度

製鉄関連遺物分類用の「標準磁石」⁽²⁾を用いて、6mmを1単位として資料との反応の程度を数字で表現したものである⁽³⁾。数値が大きいほど磁性が強い。

(4) 遺存度

資料が完形か破片かを記す。

(5) 破面数

資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。

(6) メタル度

埋蔵文化財専用に整備された小型特殊金属探知器によって判定された金属鉄の残留の程度を示すもので、基準感度は次のとおりである。

なし：磁着反応が無く、金属鉄が全く含まれないことを示す。

鈍化(△)：磁着反応があるが、感度Hでも反応しない酸化物で、金属鉄が残留しないことを示す。

H(○)：Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。

M(◎)：Mは標準感度でHの倍以上に金属鉄が残留することを示す。

L(●)：Lは低感度でMの倍以上の

金属鉄が残留することを示す。

(7) 分析

どのような分析をどのような部分について行うかを○印で示す。

(8) 所見

外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、および付着物やその他の状況について記す。

(9) 分析部分

資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するのか記す。また、観察表下の実測図の網掛け部分は、分析に供した資料の採取位置を示す。

(10) 備考

資料がどのような場所で、どのように生成されたと予想されるかなどについて記している。

第3節 成果のまとめ

1. 造構ごとの評価

以下では、第9章に記した化学成分分析などの結果をふまえて、使用された原料や行われた工程についての総合的な評価を述べる。なお、造構相互の関係は不明であるため、造構ごとに個別に判定を行う。

1-1. SK197 砂鉄系素材を用いた精錬鋳造を行っている。分析資料No.①の原料はTi量8%前後のTiチタン量の砂鉄であろう。T.程的には精錬鋳造の前半と後半にまたがる。分析資料⑧羽口の耐火度は普通である。分析資料⑦の棒状鉄製品は鋳造工房で生産された鉄製品の一端を示すもので、特に硬度を必要としない製品である。鍛打加工がやや甘く、浸炭後、空冷された鍛造品。

-
- (1) 計測方法については島根県教育委員会2002『嚴瀬山遺跡・獅子谷遺跡(1) - 造構・遺物編 -』の凡例5を参照されたい。
 - (2) 標準磁石として東北金剛佛のリング状フェライト磁石を使用した。寸法は外径30mm、内径17mm、厚さ5mmである。
 - (3) 参考文献：小林信一 1991 「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」「研究連絡誌」第32号 鶴千葉県文化財センター ※方眼台紙に6mm間隔の同心円を描き、その中心点上に標準磁石を糸で垂らす。同心内外側から津などの資料を接近させ、磁石が急激に動き始める距離を台紙上の目盛りで読み取る方法をとる。

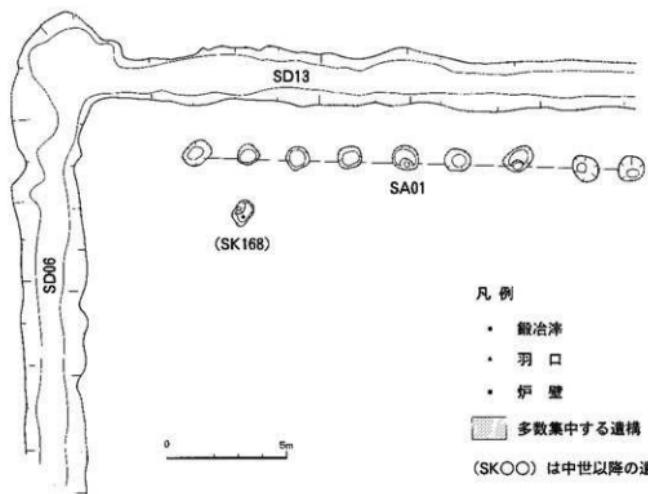
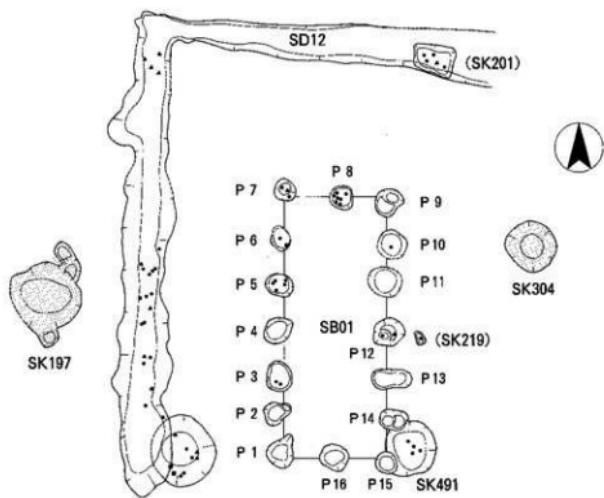


Fig.277 鐵冶関連遺物 出土遺構位置図 (S = 1/200)

- 凡例
- 鐵冶塗
 - 羽口
 - 炉壁
 - 多数集中する遺構
 - (SK○○) は中世以降の遺構

1-2. SK304 砂鉄系素材を用いた精錬銀治の最終工程または銀治鍛造の初めの工程を行っており、合鉄の銀治滓が数多く派生している。分析資料⑩羽口の耐火度は通常レベル。分析資料⑪板状鉄製品は周辺部に銀治滓

組織が付着しているので、銀治構に伴うものである。

1-3. SD12 銀治炉の炉壁は耐火度の低いもので、カルシウム量がやや高い。珪化木などの混入によるものか。

Tab. 41 古志本郷遺跡 銀治関連遺物 分析データ解析表

	工程	製錬	精錬(銀治)	銀鍛(銀治)	羽口	鉄器	炉壁
遺構名	SK197		- ① > 3.89	* ② * 0.27	⑨耐火度 1320°	⑦棒状鉄製品	
	SK304			- ③ - ⑤-④ ⑥ 1.51	⑩耐火度 1400°	⑧板状鉄製品	
	SD12						⑪耐火度 1080°

* ①回み数字は分析資料%。

* 数値は資料中のTiO₂量(%)。

2. まとめ

これまでの成果を総合して、古志本郷遺跡における銀治行為については以下のとおり総括される。

- ・炉跡など直接的な遺構は残されていない。
- ・溝に区画された掘立柱建物SB01は銀治工房であった可能性がある。
- ・遺物の全体量が少ないとから、周辺に廃棄あるいは集積されていた銀治関連遺物の一部が各遺構に二次的に混入したものとみられる。
- ・当遺跡で行われた銀治の工程は、精錬(銀治)～銀鍛(銀治)で、製品の加工まで行われていた。
- ・銀治の行われた時期は、上器の年代からすると6世紀後葉～8世紀中頃のある一定期間である。さらに当遺跡内の建物群の存続期間から推定すると、そのうちの7世紀後葉～8世紀中頃にあたる蓋然性が高い。
- ・使用された素材は鉱石原料ではなく、砂鉄原料である。

- ・砂鉄原料に含まれていたと考えられるチタンの含有量が中程度であり、周辺遺跡出土の類例から判断すると地元で産出される砂鉄を原料としている可能性が高い。
- ・4方(または2方)に羽口を取める溝を備えた炉壁が出土している。このタイプは7世紀後半から9世紀にかけての、国衙に付随する官営工房で出土することが多く、いずれも炉を複数基並べた連房式の銀治工房に伴って検出される規格性の高いものである⁽¹⁾。当遺跡についてもこうした例との技術的共通性がうかがえ、いわゆる野銀治ではない公的な官営工房での銀治が行われていた可能性を示す。
- ・当遺跡G区を中心に確認された山雲霞神門郡の郡家関連とみられる建物群の広がりからみると、銀治が行われていたSB01周辺は建物群の西端に位置し、これより西に建物跡は存在しない。銀治が郡衙に付随するものと評価するならば、工房を郡衙域の縁辺に計画的に配置したものと考えられる。

(1) 鹿之子C遺跡(茨城県石岡市、8世紀後半～9世紀)、春内遺跡(茨城県鹿嶼市、7世紀後半)、鳥羽遺跡(群馬県)などの類例がある。

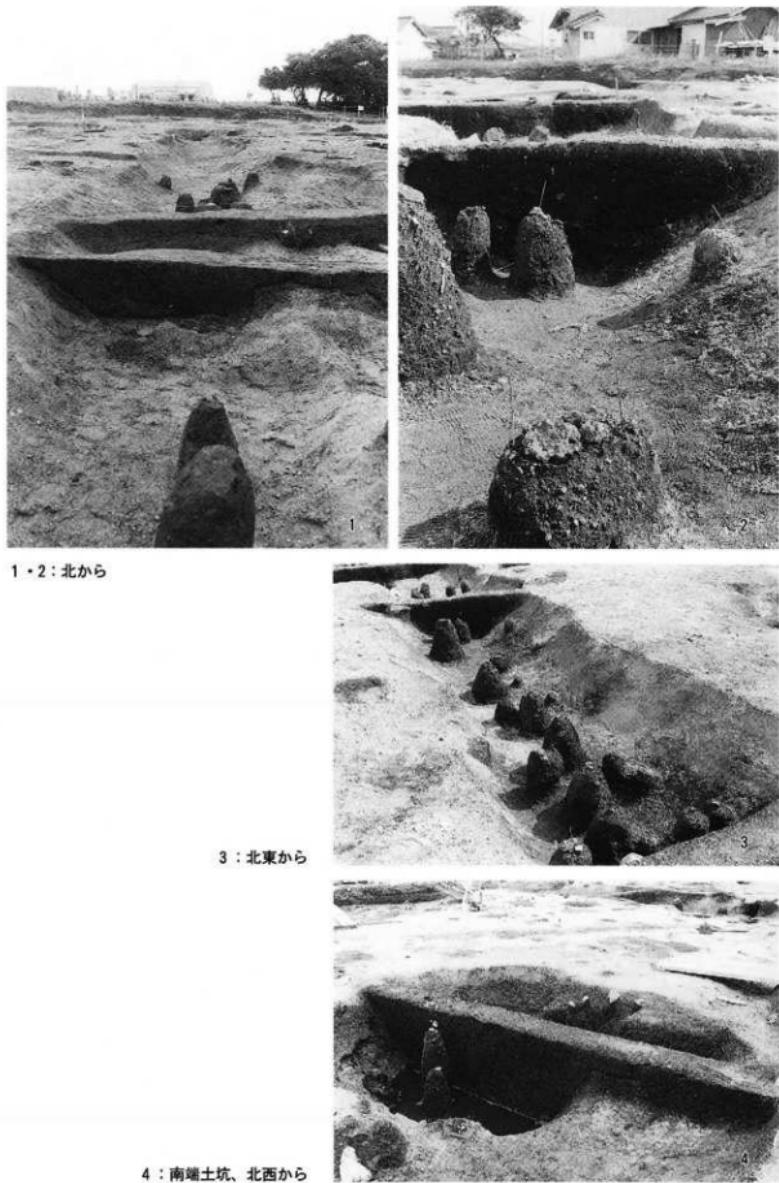


Fig.278 鋼冶関連遺物 出土状況写真 (SD12)

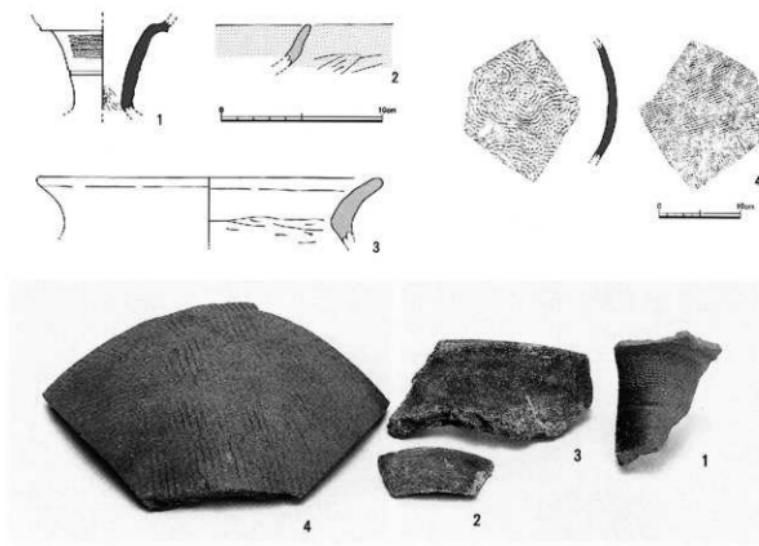


Fig.279 SK197 遺物実測図・写真

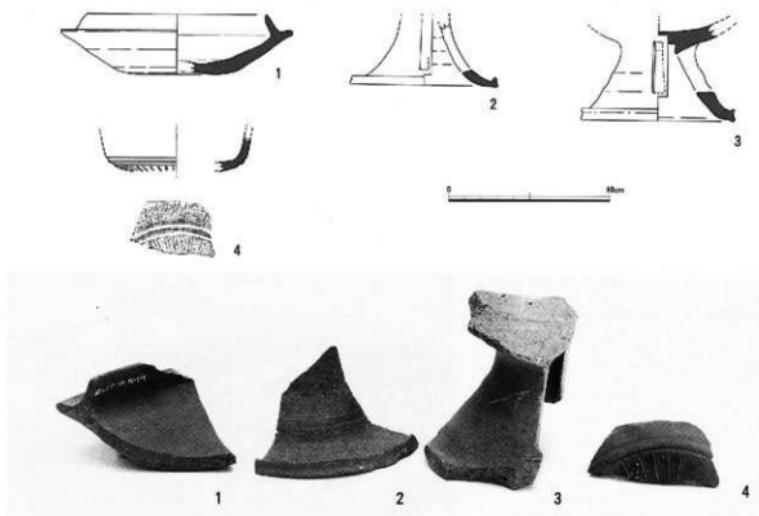


Fig.280 SK304 遺物実測図・写真

Tab. 42 鎌治開墾遺物出土遺構・遺物内容一覧表

遺構の性格	遺構名	遺物種別		メダル		度		度		度	
		桶形鉢冶炉/ H(○)・鋸(△) 個数	桶形鉢冶炉/ H(○)・鋸(△) 重量(g)	桶形鉢冶炉/ H(○)・鋸(△) 個数	桶形鉢冶炉/ H(○)・鋸(△) 重量(g)	鍛冶洋 化(△) 個数	鍛冶洋 化(△) 重量(g)	鍛冶洋 化(△) 個数	鍛冶洋 化(△) 重量(g)	鍛冶洋 化(△) 個数	鍛冶洋 化(△) 重量(g)
6世紀後葉～ 8世紀中期の 上	S.K.304	19	1968.3	1	88.2	6	520.3	3	46.9	26	269.8
	S.K.197	9	684.6	4	921.5	1	623.7	7	70.7	9	90.1
	S.K.491	1	18.5			3	70.3			3	124.2
	S.K.458									1	9.5
	S.K.485									2	28.2
掘立柱遺物の 柱	小計	29	2671.4	5	1099.7	7	1144.0	13	187.9	26	269.8
	S.B01.P.3	1	53.3							3	28.0
	P.5										
	P.6										
	P.7	1	36.9			1	18.0			2	25.3
	P.8	1	35.2							1	10.0
	P.10										
	P.12										
	小計	3	125.4			1	11.7			12	79.6
埴物区画溝	S.D12	1	95.6			2	59.8	5	59.2	6	9.3
	S.D32									1	407.5
										2	1605.8
	S.K.168										
	S.K.(99)										
中世以降の 土坑・溝	S.K.201					1	14.2	1	7.6	3	30.7
	S.K.219									1	20.6
	小計	2	97.7	2	708.8	1	284.3	1	14.2	1	27.9
	S.H耕作土(II)									1	58.6
	G.1区第2層									2	90.2
	F.5区S第2層									1	128.1
	F.4区第2層									1	199.4
	F.5区									1	42.6
合	小計	35	2991.1	7	1718.5	10	1488.1	23	343.5	28	301.6
	合	35	2991.1	7	1718.5	10	1488.1	23	343.5	28	301.6
										82	740.7
										101	2781.2
										2	1605.8
										3	37.7

輪形鍛治窯(中) 横形鍛治窯	輪形鍛治窯(中)	輪形鍛治窯(合鍛) 鋼冶窯(合鍛)	ガラス質津	鉄製品	羽 口	錫 石	複形鍛治窯	羽 口	錫量(錫冶炉)	羽 口	錫量(錫冶炉)
SK197 SK304	SB01	SK304	SK197	SK197 出土	SB01	SK304	SD12	SD12	SD12	SD12	SD32
ガラス質津付 ※1 逃縁外出土	水田耕土中	ガラス質津付 ※3	ガラス質津付 ※1	金銅H○	金銅H○	金銅H○	金銅H○	金銅H○	金銅H○	金銅H○	金銅H○
12	14	18	24	27	28	31	32	33	34	35	37
7	8	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
13	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
6	11	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
5	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
4	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
3	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
2	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
1	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

※は分析をおこなった資料 (数字は分析資料No.)

Fig.281 錫冶関連遺物 構成図

Tab. 43 緩衝関連遺物 一般観察表①

場所 No.	遺物名	地字	遺構名	計測値(cm)	幅	厚さ	重量(g)	鉱物度	備考
1	桶形縫合(11)	F区	SK-197	15.0	10.6	6.3	623.7	6なし	分析No.1 上面に大きくぼんやりした桶形縫合。底面に近く、側面に小窓状のみ残る。表面の一側が紅色の化物に覆われる。
2	桶形縫合(12)	F区	SK-168	7.9	9.5	5.7	284.3	6なし	二段階縫合沿岸。下半部の掌は左側にずれる。上面の掌は下板気孔で右側と丁前脚尾が複合。
3	桶形縫合(13)	F区	SK-197	10.3	8.1	5.1	501.6	9なし	全体に酸化土砂が強いた。
4	桶形縫合(14)	F区	SK-197	5.8	8.9	3.4	123.5	7なし	細長い桶形縫合掌。下面はきれいな舟底状。上面手前側は二段気孔。左右二方が複合。上面は酸化土の糸糸十の割合。
5	桶形縫合(15)	F区	SK-197	6.0	8.5	2.8	157.8	6なし	薄手の桶形縫合。左右二方が複合。上面は酸化土の糸糸十の割合。
6	桶形縫合(16)	F区	SK-197	5.9	9.4	2.9	138.6	8なし	分析No.2
7	桶形縫合(17)	F区	SK-304	6.7	8.8	4.8	244.2	4なし	分析No.3
8	桶形縫合(18)	F区	SK-304	10.0	8.3	3.8	219.9	7なし	分析No.4
9	桶形縫合(19)	F区	SK-304	6.9	4.0	2.0	62.7	8なし	扁平な桶形縫合片。5に似る。
10	桶形縫合(20)	F区	SK-304	6.1	6.3	3.2	98.0	4なし	下面に轍凹部の底床土が山的に因音した桶形縫合。上面から側面は不規則により変形。右側面に轍凹部の底床土が山的に因音した桶形縫合。左側面十さめ加く。形状十さめ加く。左側面は酸化土の糸糸十の割合。
11	桶形縫合(21)	F区	SK-304	7.9	5.3	2.6	94.1	7なし	扁平な桶形縫合。長軸方向に波状になり、右半部は一段気孔。両側に紅色の焼青面をもつ。
12	桶形縫合(22)	F区	水田耕作1号	13.2	9.0	4.1	439.0	7なし	不整齊円形の桶形縫合。長軸部が尖端氣味で、上面中央が大きくなっている。側面は骨部から底面と木炭氣。
13	桶形縫合(23)	F区		7.6	7.4	3.3	177.3	7なし	上面が平坦でやや扁平な桶形縫合。右側面が突出氣味。左側面は焼青。
14	縫合(今吹)	F区	SB-01(P17)	2.7	2.8	3.3	18.0	6なし	小窓状の縫合。上半部に焼化土跡が厚く、放射割れが進んでいる。下半部の縫合が強いた。
15	縫合(今吹)	F区	SB-01(P15窓穴)	3.5	2.7	3.5	30.5	6なし	手前側面が焼青となる縫合。上半部は酸化土砂が強しく、放射割れが中程度まで及んでいた。
16	縫合(今吹)	F区	SB-01(P15窓穴)	4.0	3.1	2.3	27.2	8なし	表面に青褐色の焼化土跡の多い縫合。端部に焼青がある。縫合は強いた。
17	縫合(今吹)	F区	SK-219	3.0	2.1	1.2	7.6	7なし	扁平な板状の縫合。上面は平坦で左半部は焼青がくねる。縫合は強いた。
18	縫合(今吹)	F区	SK-304	2.9	2.3	2.2	9.2	6なし	酸化土砂に覆われた焼青。わずかに焼青がくねる。縫合は強いた。
19	縫合(今吹)	F区	SK-304	2.9	2.3	1.4	10.4	4なし	扁平な小窓状の縫合。点々と伴部が露出し、やや風化味。一部が焼青化している。

Tab. 44 銀治関連遺物 一般観察表②

構成 No.	遺物 名	地区名	遺構 名	計測 値 (cm)			留置 (E)	留置 部位	備 考	
				長さ	幅	厚さ				
20	銀治津 (合鉢)	F区	SK-304	3.5	2.6	2.3	20.9	6 活化△	下面が丸みをもった治津。小原状で右子側面には黒褐色の流動浮かびのる。手前側に解ぶく れた火焼があり。	
21	銀治津 (合鉢)	F区	SK-304	2.9	2.7	1.5	10.9	7 H (C)	分析No. 5	
22	銀治津 (合鉢)	F区	SK-201	3.7	2.7	1.7	14.2	5 H (C)	扁平な銀治津。各面とも木炭灰による凹凸あり。底着付付部が強い。	
23	銀治津 (合鉢)	F区	SK-304	3.1	2.4	2.2	15.1	8 II (C)	上面には気孔の激しい銀色から黒色のガラス質。この部分は羽口由来の物か。ト平部 は灰褐色で部分的に白色。軽い火焼が面に残る。鏡面が底付の部分で複数ある。	
24	ガラス質 津	F区	SK-197	3.3	5.1	2.9	29.5	1 なし	上面上には気孔の激しい銀色から黒色のガラス質。この部分は羽口由来の物か。ト平部 は灰褐色で部分的に白色。軽い火焼が面に残る。鏡面が底付の部分で複数ある。	
25	ガラス質 津	F区	SK-01(P13)				3.2	1 なし	底面の先端がガラス質。上面には火炎があり。側面から上面には火候が窺わる。	
26	ガラス質 津	F区	SK-01(P13)	3.4	2.3	2.7	15.4	1 なし	裏面や内裏にも火炎あり。やや比所が高く、台の可能性あり。	
27	銀製品(形状不明)	F区	SK-197	6.6	2.0	9.5	6 H (C)	分析No. 7		
28	軟 製 品	F区	SK-252	7.3	4.5	2.8	60.9	6 II (C)	円錐形の板状の銀製品。酸化十号が厚く、裏裏面に虫食状の放射割れが激しい。跡 銀製品の破片の可視性あり。	
29	銀製品(形状不明)	F区	SK-304	3.7	3.6	0.6	13.9	6 活化△	分析No. 8	
30	軟 製 品	F区	SK-304				4.3	4 II (C)	細長い不規則三角形形状の真製品。口尖で脚ぶくれによりふくらむ。上面はV字状、左端部 は直角で折り曲げられている。放散の施された。	
31	羽	U	SK-01(P12)				60.3	1 なし	羽の先端部焼け。先端部焼けの外側にはガラス質の発達した所。羽口始点はきめの繊か しいので、鏡面が形成をやめる。先端部の一部が穴落したまま使用。	
32	羽	口	F区	SK-197	5.4	5.3	1.9	58.4	2 なし	分析No. 9
33	羽	U	SK-304				24.6	1 なし	羽口先端部の小焼け。全体に強く変化している。細身の羽口から身厚も薄い。先端部の方 は直角で折り曲げられている。	
34	羽	口	F区	SK-304	5.2	6.5	2.4	83.2	3 なし	分析No. 10
35	羽	U	G-2区 (P20/22)	SK-458			253.0	2 なし	羽口体部から銀製品の破片。先端部は欠落し、わずかに灰色の銀熱溶かがる。外山は長軸方向 へテ。これは平行に切りそぐられた。銀熱溶かがる。外山は長軸方向へテ。常に燃え続けた。	
36	羽	U	G-2区 (T24)	SK-485			115.9	2 なし	羽口の先端部から銀製品の破片。やや反く、基部側の円盤が丸みをもつ。基部の平面には 銀熱溶かがる。銀熱溶かがる。これは長軸方向へテ。常に燃え続けた。	
37	砾	右	F区	SK-304	4.2	5.5	3.0	64.0	1 なし	自然石の砾石。上面と下前側面のみ生き、他は被破。上面には左右方向の砥面。石質は頁岩 または砂岩。

Tab. 45 鋼台関連遺物 一般觀察(3)

構成 部	遺物 名	地名	遺構 名	計測 値 (cm)			重量 (kg)	延 長 度 メタル度	備 考	
				長さ	幅	厚さ				
38	鉛形錫冶津 (今 鉄)	F区	SD-12	4.3	4.3	1.9	23.2	2	なし ド山に付い砂利工体の最深部の所狭いの頂部する薄手の鉛形錫冶津。上面はガラス質で発泡。底部に向に入りく反る。底は弧形か屈。	
39	鉛形錫冶津 (今 鉄)	F区	SD-12	6.3	3.6	2.8	36.6	4	なし 発達が不十分な鉛形錫冶津。各山とも木炭灰が乱雑に残る。上面は一段階地。	
40	鉛形錫冶津 (今 鉄)	F区	SD-12	6.7	5.3	2.7	96.6	7	なし 左の手前部に付い不十分な鉛形錫冶津。右側背部には羽口出来の凹凸片の跡。	
41	錫冶津	F区	SD-12	2.7	3.3	2.6	24.2	6	なし 錫化土子から削られた小塊状の錫冶津。	
42	羽	口	F区	SD-12			24.2	2	なし 羽の先端部の小破片。先端部外面が黒色ガラス質化し、ひび割れから部分的に脱落したまま突出。胎土はきめが細かく、白色の微細な砂粒が入りつゝ、34と記した。	
43	羽	口	F区	SD-12			83.7	1	なし 羽の体部破片。外面上には長軸方向への割目。剥離部は先端側直角で、本部側は開く。	
44	羽	口	F区	SD-12			120.7	2	なし 羽の体部破片。やや開き気味のタイプ。通風孔部はわずかに覗け状で壁孔も見え、内部には羽孔部から熱熱部まで。胎土はきめが細かく、砂粒とわすかな砂粒が混在する、胎土はきめが細かく、砂粒とわすかな砂粒が混在する。	
45	羽	錫(錫台)	F区	SD-12(錫端 円形土端F区)	13.5	12.8	6.6	549.1	2	なし 分析No. 11
46	灰	壁(錫台)	F区	SD-12 (P685)			1056.7	1	なし 4片ほどに割れているが、もとは回の體体。多量に化粧土が取り込まれた、ざっくりとした胎土。表面は4面などどの面からも、粗分野に吸出、細分野に吸出、下面には吸出痕がなく、地面との接觸面か。△剥離部から基部までの隙片、先端部は火薙し、外側は長軸方向へのケズリとナード。本部は半田田に成され、外面上にケズリ日の止め裏が施設に残る。通風孔部は先端部からやや開き気味。外面は薄い滑化層から熱熱部まで。胎土はかなりきめの細かい砂土質で、粗い砂粒がわずかに混和される。	
47	羽	口	G-2区 (錫端部部分)	SD-32			345.4	1	なし	

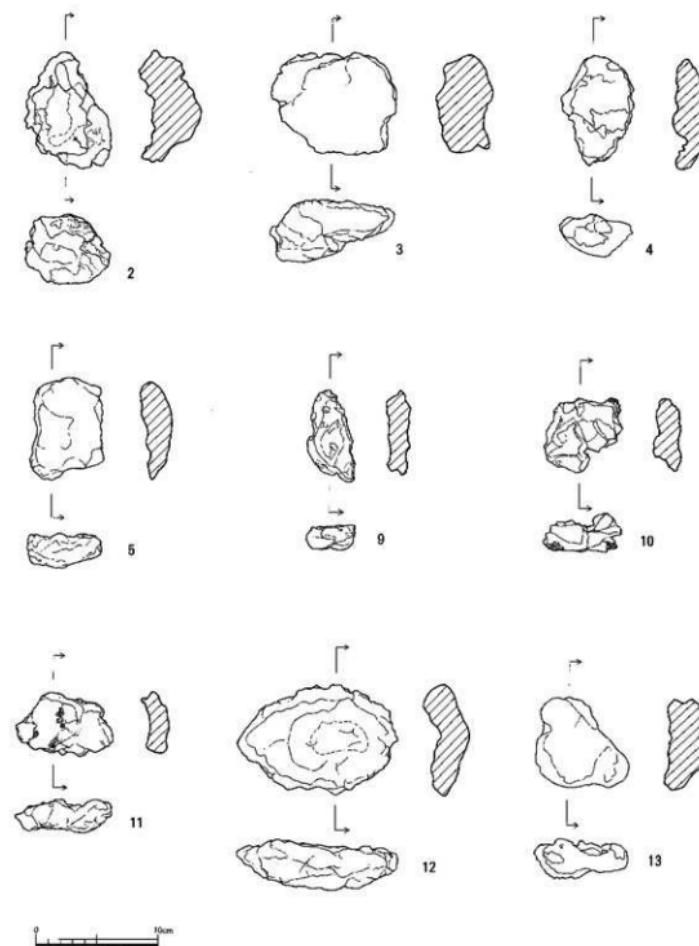


Fig.282 銀治関連遺物 実測図① (楕円銀治溝、S=1/4)

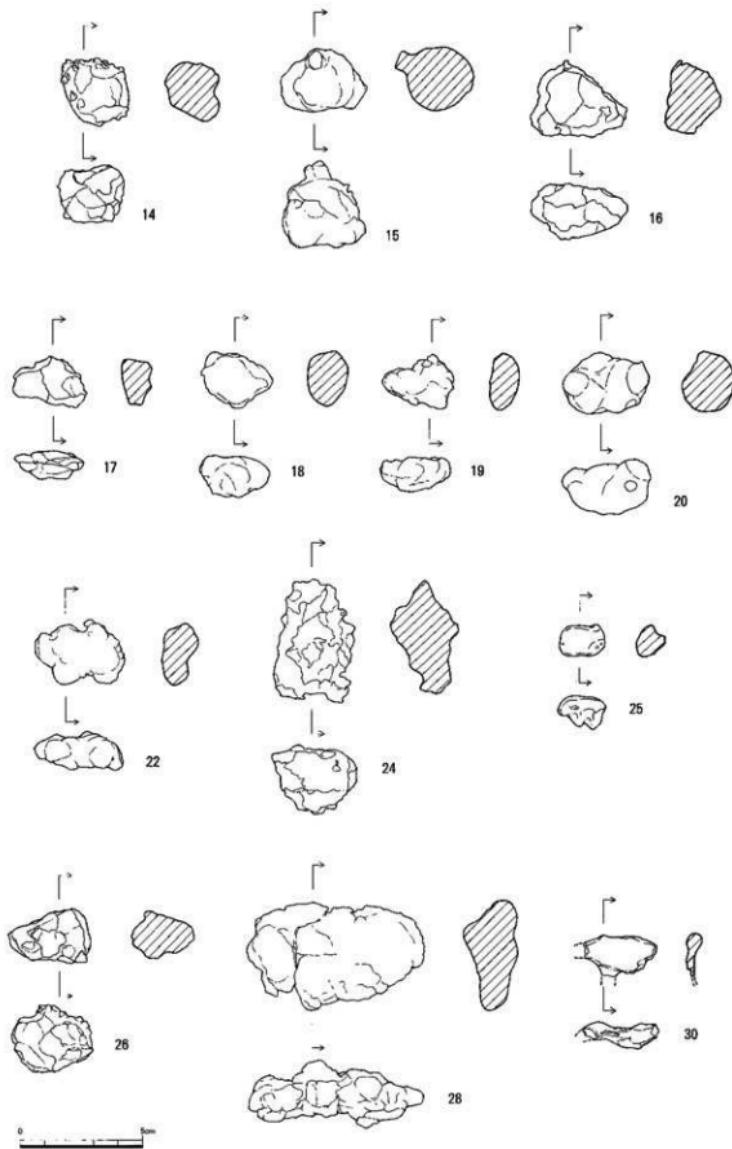


Fig.283 鋼冶関連遺物 実測図② (鋼冶滓、ガラス質滓、鉄製品、S=1/2)

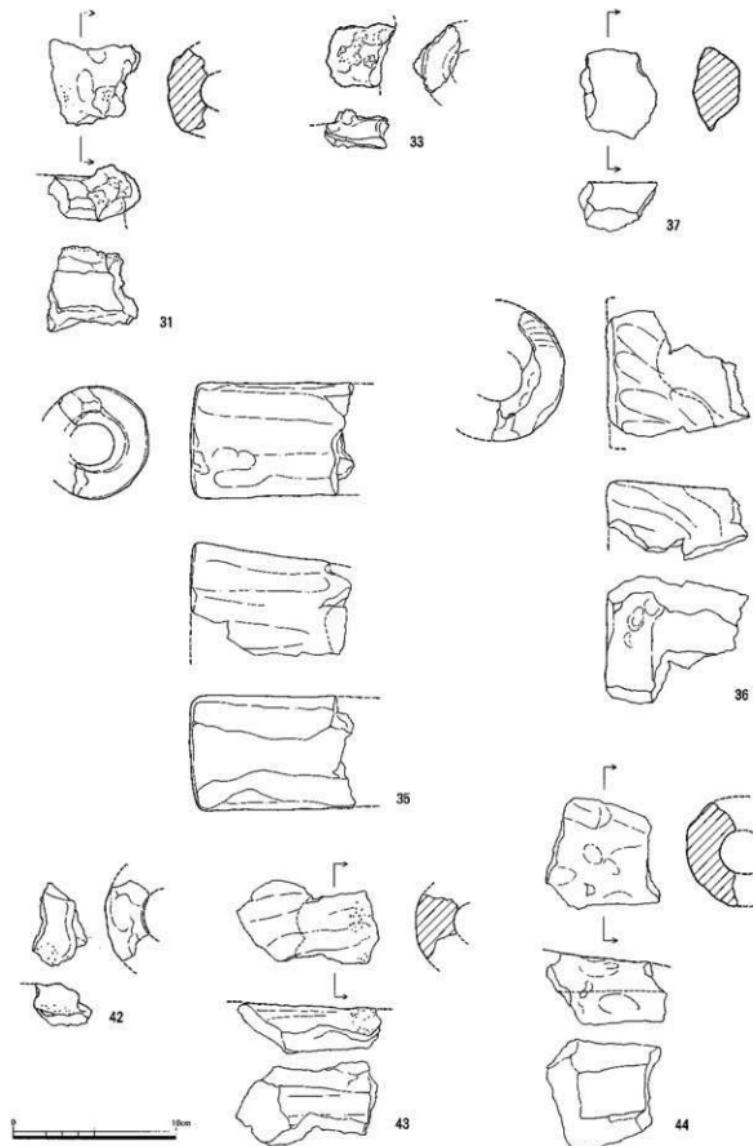


Fig.284 鋳冶関連遺物 実測図③（羽口、砥石、S-1/3）